

---

# Dear 狂愛

みの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dear 狂愛

### 【ZPDF】

Z6072Q

### 【作者名】

みの

### 【あらすじ】

フルコンプリートした乙女ゲームの世界に、トリップした女は、乙女ゲームが大好きな29歳。気付くと美少女高校生になっていた。トワがトリップしたゲームは、“狂愛されたい”というテーマで制作され、話を進めて行くうちに攻略対象キャラクターが、高確率で病んでいく。各キャラクターのトルウェンド以外は、主人公が死亡するという問題作なゲーム。そんな世界で、トワが生き残ろうと頑張っている話です。バッドエンド表現有です、最後はハッピー エンドかも？

## プロローグ（前書き）

始めは微妙な恋愛ですが、後半は濃い恋愛でドロドロになる予定です。物語の途中で主人公は時々、死にかけます。コメディ色も入ります。それが嫌な方は、ご注意下さい。

## プロローグ

「今度は絶対、間違えない！」

男の声が、白い空間に響き渡る。

「お前を、守りきつてみせるから」

その声は、決意と後悔に満ちていた。

「戻つてくれ……」

突然現れた0と1の数字が、羅列して男を包み、侵食していった。

男の身体が透けていく。男は目前の少女に、必死に手を伸ばすが届かない。

「愛している……世界の誰より」

男が消えた空間に、1人の少女が立っている。

「誰か、彼を愛して」

祈るように紡がれた彼女の言葉は、誰の耳にも届くことなく、消えていった。



## プロローグ（後書き）

小説初心者です。よろしくお願ひいたします。

# 1話 トリップー初めましてシントレ弟君？

「うーはーなのよ」

目を開けると、見知らぬ住宅街が広がっていた。

さつきまで私は、『』寝してスナック菓子を食べながら、家でゲームしてたよね？ 夢にしてはリアルすぎる。誘拐だつたら、こんな路上に放置とかしないだろうし。残るは、私は、実は夢遊病でこの場所に、一人で来たとかしか思えない。

「あはは、ありえない！」

叫んだ私に、近所の住人であろう、おばさま達がヒソヒソと話しているのが見える。確かに状況を知ろうと周囲を見回す、私は、拳動がおかしい不審者にしか見えないだろうが……そんな、そんな、痛い子を見る目で観察しないで！

流石にこの場所にいるのも氣まずいから、移動する。まあ、ここがどこかはわかんないけどね でもなんか、見覚えあるようだな？

歩きながら、頭の中を整理する。自分の名前は、佐藤 永久<sup>サトウ ヨウ</sup>で、乙女ゲームが大好きな29歳。普通に働いて、普通に生きてる一人暮らしだけで独身女性。

ドクシンとでもヒトコモリとも呼ぶがいいわ！ 普通に生きて、必死にゲームしてきた結果だ。やつてきた乙女ゲームは星の数程ある。初恋の相手もゲームのキャラクターだった。家に帰ればダーリン（

ゲームのキャラ(ラ)達がいてくれる。

寂しくなんてないー……コンビニ弁当を買っての帰宅途中以外は。

気がつけば神社の境内にいた。横には、神主が住んでいそうな家らしきものがある。もう一度言つ、家らしきものである。良く言えば、伝統の日本家屋。悪く言えば、ボロい木造平屋、確實にテるだろう。黒い服のG様ではない、白い服のH様が！

それにしても、良い匂い。もう夕飯の時間。私が最後に食べたのって、スナック菓子だけだ。このままじゃ、飢え死にする…ヤバイよ、私！

お腹の虫が鳴く音で我に返る。

「……お、落ち着ける場所を探していたんだあつて、断じて、家庭の、手作りカレーの匂いにつられたわけじゃないからね！」

「手前、人の家の前で何を騒いでんだ！ 近所迷惑を考えろ！ 殴り殺されてーのかー！」

「うわあ、『、『めんなさいー』」

「あ、姉貴かよ？ 怒鳴つて悪かった」

え？と首を傾げつつ出てきた銀髪不良美少年を観察する。私には姉がいるが、弟はいたことはない。生き別れの弟なんて絶対にない。でも、知っている気がする。

つり目 + 銀髪 + 美少年 + 不良 + 弟 = シンデレラ

ツンデレ弟？ボロ神社に住んでいるツンデレ弟だと！知っているよー。多分、合っているはず、自信ないけど。私は、銀髪不良美少年を見て、遠慮がちに声を出す。

「綾君？」

「ん？ 姉貴、腹減つてんだる。姉貴は昔から腹減ると、ボケツとしてるからな。飯できてるから、さつさと入れ」

田の前には現実にいちゃいけない人がいる。

呆然としている私を、トロイとか何とか言いながら、ボロい家の中に引っ張つていくツンデレ弟。

ツンデレ弟、綾君はDearという乙女ゲームに出てくるキャラクターだ。

苗字は忘れたけど、日本人の母と、イギリス人の父とのハーフで、銀髪と蒼眼の美少年。中学三年で姉大好きの超シスコン。姉に男を近付けないために不良になつた。家事と料理が趣味。姉には不良であることを隠しているらしい。

古い畳が引いてある居間に連行され、ちゃぶ台の前に座らせられる。

ぐうー……と私のお腹が鳴る。

カレーライスを持ってきた綾君と田が合ひつ。

み、みてんじやないわよ！ 恥ずかしい……

綾君は、顔を下に向けた後、笑いをこらえきれなかつたのか噴出した。

「わかりやすい奴」

言ひ返さうとしたが、ぐつと堪えた。今は、ご飯が先よー。

綾君に、一応、お礼を言ひ、食べ始める。お腹が減りすぎて、自分が姉と呼ばれたこととか、この場所はどうとか、笑われたとか、今はどうでもいい！

これが背に腹は変えられないってやつ？

## 2話 私が美少女！？

「美味しい！」のカレーって……もぐもぐ……綾君が……作つたの？」

「姉貴の料理は不味くて喰えないんだから、俺しか作れないだろ。てーか、飯喰いながら喋るな！ こぼしてんぞ！」

「うつ、言つてはいけないことを言つたな！ 図星はついたやいけないつて学校で習わなかつたか。餓鬼！ 料理ができたら、毎日、コンビニ弁当なんてしてないから！」

私は大人だから怒つたりしないが、弟を睨み付け圧力をかけておく。……なんで赤くなる弟！ 空氣読め！

「ところで、お父さんとお母さんは？ 死んでなかつたと思つけど」

「いや、勝手に殺すなよ！ 昨日の朝に親父の仕事かなんかでイギリスに行つただろ！」

「ひそり言つたのに、私の言葉の最後、聞こえていたの？！ でも留守で良かった。見つかったら

『この女の人は誰かしら？ 綾』

『アヤが女人の人を連れ込んだの？ ……さすがパパの息子ダーハー。』

『お、落ち着いて下さい！ お父さん！ お母さん！』

『あなたにお母さんなんて呼ばれる筋合はないわ！』

『アヤ、そこまでやられちゃつたら、責任とつてもうわないとネ…』

『そうね、パパ。日本のやり方でね』

『ワオ！ ジャパンーズ！ 腹きりヨー！？』

逆のよつたな氣がする。でも、私は年上なんだから、きっと、いつなるわ。よくわからなこけど、いついついつて土下座とかしたほうがいいのかしら。

「おい！姉貴！」

「うわー！」めん！  
「

吃驚した！  
妄想から帰ってきた時は、周りの状況確認つて難し  
いのよね。

「何で、謝つてんだよ！ さつさと風呂入つてこい！」

頷いて、歩を出す。「」飯も美味しいし、風呂も準備してあるなんて嫁にほしいぞー。口さえ悪くなければの話だけね。

「綾君、うまいもつさま。本当に美味しかったよ」

「当たり前だろ。姉貴好みの味にしたんだから……。」

「え？」

「なんでもねえ！さつさ行けよ！」

顔を真っ赤にした綾君にお礼を言つて、やつ氣なく早歩きで廊下に出る。

当たり前だろ。姉貴好みの味にしたんだから……！

自然に言つてきたから、幻聴かと思つた。自分の頬が熱をもつてくるのがわかる。

さつきの言葉は、照れるよ！ 可愛すぎるー 私の方が恥ずかしくなるなんて、どんな拷問なのー！

ツインデレのデレの破壊力にやられてしまつたらしい。

落ち着いてきた私は、大事なことに気がつく。風呂場はどうへー！ 今別れた綾君には、壮絶に聞きにくい。よつて適当に歩いて探すことにした。

それにしても綾君は、29歳の女を捕まえて姉貴と読んでいたのよね。確かにDearのゲームの主人公は、ピチピチの高校1年生で、綾君に劣らず美少女だったはずだ。間違つても、私には似てい！

あつ、そうだ！公式には書いてなかつたけど、綾君は、0・0001な視力の持ち主なのかも！

つりぢょひると1~2時間歩いて、やつと風呂場に着いた。脱衣所で服を脱いで、田の前にある鏡が、田に入る。

「嘘でしょ……これは本当に夢じやないの？」

田の前には、ふわふわな銀髪を腰まで伸ばした、どこのお姫様だと思うような美少女が蒼眼が落ちそくなくらい眼を見開いていた。美少女は、私の動きを真似て動く。お肌はすべすべで、シミも皺もない。

はっ！ちょっと喜んでる場合じゃないわ。

これは認めるしかないのね  
主人公ヒロインになっていた。

私は、Dearというゲーム

### 3話 現状の把握！え？死亡フラグ！？

Dearというゲームは、私が当時高校1年の時にフルコンプリートした乙女ゲームだ。

もしも、夢を見るにしても、トリップする乙女ゲームがあるにしても、私は、絶対に、このDearというゲームは選ばない。なぜなら、姉から借りた、このゲームの趣旨が“狂愛されたい”だった。選択肢を選び、進んでいくうちに攻略対象キャラクターが、高確率で病んでいく。各キャラクターのトゥルーエンド以外は、主人公が死亡するという結末。高校1年の、純粋な私には、かなり、ショッキングだった。

鏡を睨み付けて、今の自分の姿を、日に焼き付ける  
としても、死にたくない。  
夢だ

「絶対、生き残ってみせる！」

自分に渴を入れ、風呂に入り、自分の部屋に行く。  
風呂場を探すついでに無駄に広い家を歩き回つて、部屋の配置を確認して自分の部屋を見つけたから完璧だ。これからDearの主人公として生活しないといけないのだから記憶の整理と、情報収集をしなくちゃ！ 攻略対象達のLOV度を上げなければイベントは起きないしね。

目指すは死亡フラグを総回避！

## 4話 こぞ学校！ホスト教師？！スルー！

いくら考えても、ゲームの内容を詳細には思い出せない。

「もう！ 私の馬鹿！ 何で思い出せないの…」

布団に寝転がり、顔を枕に埋める。意味もなく、手足をバタバタさせてみる。

私、……何やつてるんだ。29歳にもなって、見苦しい。今のゲームの主人公の姿でも、綺麗なお姫様が、こんな残念な行動してるなんて、やるせない。つて脱線してる場合じゃない！

高校1年で16歳？時にやつた以来だから、13年前！？ 昨日の晩御飯も思い出せないのに、13年前の記憶なんて思い出せるわけない！思い出すことを早々と諦める。29年も自分の、残念なお頭と付き合っているから、限界がわかつてゐる。「生活しているうちに、思い出すしかないわね……」

詳細は思い出せないが、いくつかの、悲壮なバッドエンディングが、頭の中でリピートされる。

「うげえ、スプラッタ……」

自分の残念な記憶能力に呆れてか、現実に迫る死への恐怖なのか、涙が滲んでくる。29歳にもなった女が、そう簡単に泣いてたまるか！乱暴に布団に入り、ギュッと目を瞑つて寝た。

翌日の朝、起きて気づいたこと、私は繊細な人間ではないということだ。昨日は布団に入つて3秒もたたずくに曝睡していたからね。

私は、未来から来た青タヌキ型ロボットの名前がタイトルの、主人公の男の子が頭によぎる。

いや、違うのよ……って誰に言い訳してるのよ、私！

居間に移動すると、綾君がトーストとスクランブルエッグ（ベーコン付）を、ちゃぶ台に並べている。

「綾君、おはよう」

「おはよーって、姉貴！　まだパジャマなのか！　今日は学校だろ？」

「え？　ど、どうしよう？　学校つて何時から？」

「落ち着け！　学校は8時半からで、今は、7時55分だから十分に間に合うだろ？」

なんだと！　あと約30分！？　今から朝ご飯を食べて、着替え、化粧して、学校に行くつて全然、間に合わないよーせつかく綾君が作ってくれた朝食をかきこんでむせる。綾君が背中を摩つてくれたり、綾君がごぐ自転車の荷台部分に乗つて、2人で途中まで一緒に登校したりとかイベントがあつたけど、急いでいるから甘い雰囲気でもなんでもなかつた。

恋人つて言つよつ、なんていうか介護されてる？！

ピチピチの美少女高校生には化粧は必要なかつたので、思つたよりも早く支度ができた。

今、高校の校門前に立つています！ 始業の3分前で間に合つたつて間に合うわけないよ！ 始めてきた学校で、ここ何処？ 状態だよ。

昨日の情報収集で、主人公のクラスは、1年1組だという。これは知つていた。しかし、この広い学校で自分の教室を探すことは不可能だ。始業の鐘も鳴つたし、諦めよう！ 今日は学校を探検して建物の構造や配置でも知つておくか。無駄に広い学校を見渡す。

学校の探検をしようと、廊下をウロウロしていると 用務員さんに捕獲された。昆虫採取用の網で？

用務員さんは何故に、昆虫採取用の網とか持つてるのよ……迷いなく、私の美しい顔に振り下ろすとか正気なの！？ 半眼で用務員さんを睨むと、相手も不審な目で私を見てくる。

授業時間にウロウロしているなんて不審者だと思われたら

『そここの女！ 怪しい奴め、お縄にしてくれる！』

『用務員さん、待つて！ 私はこここの生と

『言い訳は、お奉行様に聞いてもらえ！』

『そんな殺生なあ。私には病氣の弟がいるんです』

痛い、痛い！ うわ！ また妄想の世界に行つてた。

用務員さん、怪しい目で見るのはいいけど、網が、顔に食い込んでる！ 用務員さんに正直に迷つたことを告げると、少し笑つた後、網を何処かにしまい、親切に案内してくれた。私は、網の模様が残つた顔を摩りながら、用務員さんの後を付いていく。

私が1年1組についたのは始業の合図の30分後。教室に入つてすぐ、教師と目が合つ。

「この人は！攻略対象の教師だ！確か、藤宮 フジミヤ 恒キヨウで29歳、数学担当。ホストにしかみえないイケメン教師。性格は、俺様でドSは基本装備。いつもダルそうにしているが、しつかり生徒を見守る良い先生で、生徒からの人気が高い。

「遅い！俺様の授業に遅れるとはいひ度胸だな！遅刻理由を言え！」

「す、すみません！学校で迷つていました」

「お前、入学して1週間もたつてんのに、迷うとか器用だな」

「返す言葉もないです……」

「まあ、何でもいいから席に座れ。今日は1日中テストだ。遅れてきたからには、相当、自信があるんだるーな」

「一ヤリと笑う藤宮先生を適当にあしらい、教室に一つだけある空席に座る。

危ない！攻略対称キャラクターに目をつけられるなんて、自殺行為だよ！なんとかなったかな？

テストは中学卒業した生徒の実力を知るためのものらしい。はつきり言つて、テストなんて無理だし、嫌いだ！でも中学レベルの問題はなんとか、解くことができた。平均点は取れているはず！

テストが全て、終わり放課後になった。

何故、誰も話しかけてこないの！

友達に話しかけてこられた時のために言葉を準備していたのに！

ゲームの知識を必死に思いだした。そういえば、男にモテるヒロインは女の、目の敵にされ、女友達がない。男友達は、ツンデレ弟に駆除されていた。……わかるよ！ 女子達！ 私も、可愛い女子なんて、全員、滅べと思ってたし！ しかし、逆の立場になつてみると、自分が美少女なんて、ありえない！ 寂しそぎる！

このゲームの主人公は、友達がないらしい。

そんな学生生活は、青春を溝に捨てているようなものじゃないか

！絶対に友達つくってみせる！

いきなり、今時の女子高生に話しかけるのは怖いから、大人しそうな子にしよう！……私つて、どんだけビビりなの！？

私は傍から見てもわかりやすいほど、がっくりと肩を落とした。

チキンな主人公<sup>ヒロイン</sup>つて駄目かしら？

## 5話 女友達ゲットだぜ！

放課後は、ほとんどの生徒は帰宅したり、部活に行つたりでいなくなつた。たまたま隣の席に座つている女の子がいたので話しかけてみる。

「ねえ？今日のテストは難しかつたよね？」

「はっ、はい！そつですね、トワさん」

「私の名前……」

「ふえ？トワさんの苗字つて長いから……あーーー、『じめんなさい！』私つたら失礼なことを言つてしましましたね」

「いいえ！名前で呼んでもらえると嬉しい。私の苗字が長いのは、本当のことだし。今日のテストは、名前書くだけで、時間が終わるかと思つたわ！」

私の名前……ゲームの時はカタカナで名前をいれるのが私流。Dearというゲームは主人公の苗字は固定されているのでデフォルトのままだが。

製作者は厨一病か！と思つほど苗字が長い。思い出すのにも時間がかかり、冗談じゃなく、本気で名前書いてテストが終わりそうだった。

私の本当の苗字は佐藤だから！　日本人で1番多い苗字で書くのも簡単！　名前は覚えやすい。1つだけ欠点があるけどね！　“佐藤さん”と呼ばれても、どの佐藤さんですかって、なるところとか。

「トワさんって、意外に面白い人なんですね」

その後、話が弾み、2時間位して別れた。彼女は瀬戸せと 可憐ちゃんかれんで、最近、近所に引っ越してきたらしい。名前のように可愛らしい彼女は、控えめで優しい性格。“のほほん”という言葉は彼女のためにある！みたいな子だつた。

やつたー！ 初めての友達ゲット！

このゲームで友達というイレギュラーな存在を作ってしまつたことに、後悔することになるのはずっと先の話だ。

## 6話 美人神主さん！到来！

帰るひとして氣づいたけど、家はどこだっけ？

都合よく弟が現れるはずもなく。とぼとぼ歩き出す。昨日は人気のない所を探して辿り着いたんだから、今田もそいやつて行けば、家に行けるはずよね！

ちゃんと家に帰れましたよ。3時間後にね！まあ自転車で10分の所にある自宅に、どうやつて3時間もかけたかは聞かないで。

家に近づくと、人の姿があった。綾君じゃない、こんなボロい神社に御参りに、来た人かな？

とてもなくイベント臭がする。遠くから観察していると、御参りに来た人が振り返って、私を見た。

「こんにちは。御参りですか？」

……いやいや、こっちのセリフだから！水色長髪の美人さん！

挨拶を返すと、美人さんが二コ二コ顔のまま近づいてくる。笑顔の人気が距離詰めてくるのが怖いって感じるのは、私だけ？ というか美人さん。背が高いよ！顔も近い！私の身長より、頭2つ分高い背を丸めて、彼に凝視されている。

「やつぱり！ 君がトワちゃんだよね？」

この美人さんの声、低い。男の人？

「ノリトさん?……」

驚いて、つい声にしてしまった。  
「この人は攻略対象じゃん!……蒼井<sup>アオイ</sup> 則斗<sup>ノコト</sup>。水色の長髪美人。年齢は忘れたけど、神主がいないボロ神社の神主代理をするために、一緒に住むことになるお兄さん。常に笑顔で、何考えているかわかんない人。私がゲームやっている時の印象は、腹黒な美人!この人のバッドエンドが一番、壮絶だったから、その他の情報を忘れた。

「あれ?僕のこと知っているの?」

ヤバッ!<sup>ショッ</sup>主人公<sup>ヒロイン</sup>ってノリトさんのこと知らない設定だったよ。どうやって誤魔化そう?

考えていると、いきなり腕を引っ張られる。私は、ギャー!と女子にあるまじき悲鳴を上げて、ノリトさんの腕の中にいた。……女子の子つて年じゃないからいいのだ!

「トツちゃんは、表情がぐるぐる変わつて可愛いですね」

“ドキドキする”

この言葉でわかつてくれる人が、何人いるかわからないがこの表現は、恋する乙女以外でも使える。それは、恐怖に脅える時だ。

## 6話 美人神主さん！到来！（後書き）

次の話は15Rで残酷描写有です。注意してください。

7話 15R 美人神主と危ナイ過去！（前書き）

残酷描写が有ります。嫌いな方は、避けてください。お願いします。

## 7話 15R 美人神主と危ナイ過去！

ノリトさんのバッジondは、今でも鮮明に思い出せる。

バッジondルートに入つたこと気付かずゲームを続けていると  
2つの選択肢がてくる。

1つ目は“一緒になる”

2つ目は“断る”

これは、結婚のことだな！と一つ目の選択肢をほいほいと選んだ。

“一緒になる”

『ありがとう。トワちゃん』

いつも通りの笑顔で近づいてきたノリトさんは、私を抱きしめる。  
次の瞬間、胸に衝撃が走った。

『の……りとさん？』

私が刺されたと認識した時には、次のナイフが迫っていた。  
滅多刺された私が、動かなくなつたことに満足したノリトさんは

私だつたモノを、むつしゃ、むつしゃと……食べた。

『これで、ずう一つと、いつしょ、だよ』

顔や服を真っ赤に染めて綺麗に笑うノリトさんは、私の名前を呼ぶ。シアワセソウ。

「トワちゃん！」

ノリトさんが、私を呼ぶ声で回想から戻ってきた。彼が本当に心配そうにしてくれている。でも、私にとっては地獄の続きをを見せられているようだ。本能的な恐怖に、鳥肌がたつのが止まらない。

「この人は、まだ、あのノリトさんじゃないつてわかっているのに！」

「姉貴！」

私は、綾君の声が聞こえたことに安堵の息をはいて、気絶した。

7話 15R 美人神主と危ナイ過去！（後書き）

なんかすいません。

## 8話 同居？遠慮します！

「…………せー…………てけ……」

「ひるせいなあ…………もう、朝？ 今日は学校だつけ？」

私が田を覚まして、初めに田に入ったものは、ノリトさんが綾君を、押さえ込んでいたところだった。綾君は、怒つて顔をゆで蛸のように真っ赤にさせ、暴言を吐きまくっている。対称的に、ノリトさんは相変わらずの笑顔で、綾君をなだめているのか、煽っているのかわからない言葉で話している。

おかしい…………いや、画的には、正しい。美少年が美人なお兄さんに、押さえ込まれている。しかし、美少年こと綾君は、間違つても不良なのだ。こんなに、大人と子供の、力の差といえるほど弱いはずがない。

とりあえず、今は場を収めないと！

「2人とも、何してるの？」

「姉貴！ 田覚めたのか……くつ」

綾君は、嬉しそうな顔をした後、現状を思い出したのか、抵抗を続けていた。ノリトさんは、その声が聞こえていないようで、押さえこむ力もそのままに、私に話しかけてくる。

「ああ、トワちゃん。もう大丈夫ですか？ 気分は悪くないですか？」

「は、はい。」迷惑をかけてしまって、すみません

「それは良かつたです。」

「おーーーロン毛野郎、さつわと手を離せよー。」

「それは嫌ですね。離したい、綾くんは僕を殴りたいありますよ~？」

「当たり前だ！ ボコボコにして、そのロン毛を引っーーー抜くー。」

「引っ越し抜かれても、僕は、後ろから着いて行きませんよ~。」

「なんの話だよー。本気でムカツクー。」

ピクミ とか大分前のゲームを持ち出してきましたね、ノリトさん。ピクンなら、引っ越し抜かれたついでに食べられちゃって下さいよ。私の安全のために じゃなくて、喧嘩止めなきや。

「弟にはノリトさんを殴らないよつて、十分言い聞かせますから、離してもらえませんか？」

「もうですねぇ。どうしましょー？」

「殴つたりしないわよねー（逆らつたら、痛い目に合はわすぞ。）

綾君？』

わたし  
姉の満面の笑みという圧力をかける。綾君は、ノリトさんと私を見比べた後、静かに頷いた。

偉いぞ、それでこそパソコンだ！　いい弟を持つて姉（偽者だけど）は嬉しいわ。

それから話は進んだ。ノリトさんは海外で、主人公と綾君の両親にスカウトされて、住み込み、3食付きでボロ神社の神主になることを承諾した。らしく、ゲームの正規の流れ通り、同居することになった。

両親よ、何故に海外で、わざわざスカウトするんですか！　殺人鬼（まだ違うが）を家に住まわせるとか、両親は鬼畜過ぎるわ。子供を崖下に落として、登ってきた子供だけを育てる教育方針なの！？

ノリトさんは自己紹介をすると、質問はないかと聞いてきた。その言葉に、目を輝かせた綾君が、質問を浴びせ続ける。敵意とかじやない意味で。

落ち着いた綾君は、状況を理解した途端、手のひらを返したように、ノリトさんに懐いた。なんでも、男兄弟が欲しかつたらしい。現金な奴め！

姉の立場は、どうなるのよ？　可愛さあまつて、憎き百倍なので報復します。目を潤ませ、今にも泣きそうな顔を作り、弱々しい声を出す。

「綾君は、お姉ちゃんなんて、もういらないのね……」

それを見た綾君は、何らかのショックを受け、自己嫌悪モードに入った。居間の隅で、体育座りをしてブツブツと独り言を言っている。当分は、大人しくしているだろう。

ノリトさんに話かけようと振り返ると、すぐ傍にいたらしく、軽く肩を抱かれて顔を覗き込まれる。笑顔が怖い。近いよ、来ないで！来ないで！ 誰か塩を持ってきて！ ？

ノリトさんの手が動く。そして、私の田元に手を持つていて、さつきの（嘘泣きの）涙を拭ってくれた。優しいな、ノリトさん。お礼を言おうと口を開く前に、ノリトさんが話しかけてきた。

「トロハセちゃんは、泣き顔も可愛いですね……」 泣かせたくなる。

最後にボソッと聞こえた声に、魂が口から出でてくる思いだ。血の気が下がっていく、今の私は、そもそも顔が、快晴の空のように真っ青だわ。こんなイベントあったけ？

その後、いつの間にか復活した弟は、ノリトさんと私を引き離した。そして、ノリトさんに喧嘩を吹っ掛けていた。姉に近づく男は許せないそうです。……呆れつつも思つてしまつ。もつとやれ。

喧嘩の途中にノリトさんは何かを思つ出したようで、私を見る。

「トロハセちゃんも、僕には敬語じゃなくていいですか？」

「はい。考えておきます」

ノリトさんは、私が敬語のままである」とこ不満なのか、一瞬だけ悲しそうな顔をした。

そんな顔しても無駄よーあなたのフラグは絶対に立てたくない。

つまり、仲良くする気はない！

## 9話 シンデレ弟！健全は不健全！？

次の日、学校から無事に帰ってきた私は、神社の境内でほつをを持つて、掃除をしているノリトさんに出会った。仕事中なので、神主服を着ている。ノリトさんはいつもの2倍は美人度が上がっている。

制服とか、萌える！ ハア、ハア

弱冠、息が上がった私は、危ない不審者に見えるだらう。いつか、本物の主人公に身体を返せって言われそう。いつでも返すけどね！

私に気付いたノリトさんが、掃除を止めて、いつもの笑顔で近づいてくる。

「トワちゃん、おかえりない」

「ただいま。綾君は家にいますか？」

「さつきまでいたんですが、味噌と醤油を買つてくるつて出かけましたよ。急用ですか？ 僕でお手伝いできるなら喜んでしますけど

「違うのー。聞いてみただけだから、何の用事もないわ！」

慌てて敬語がなくなつたがしようがない。

「そうですか？ トワちゃんが望むなら、何でも協力しますから、いつも来てくださいね」

そう言って、掃除に戻つていった。

どうして、ノリトさんは、話を大げさにひもつていいとするわけ？

そもそも、綾君がいなのはノリトさんのせいだ。ノリトさんは細腰な美人という、みかけのわりに、よく食べるのだ。そして、和食好き。しかし、綾君は主人公ヒロインが洋食好きなため、洋食作りを極め、和食はあまり作らない。そのため和食用の調味料は少なかつた。それなのに、ノリトさんは和食を要求し、大量の食事を胃袋に納めた。よつてこの家はオイルショックならぬ、調味料ショックを起こし、綾君は、買物に行つた。という短いようで長い経緯があつた。

え、私が好きな料理？ 長きに渡るコンビニ生活のせいで、私は何でも食べられるし、好きだ。あえて言つなら、手作り料理と、家族で囲む御飯に、飢えている。

私は、ノリトさんにお礼を言つと、早足で家に入った。扉を丁寧に閉めて、ニヤリとする。今日は、ある重要な目的をはたすのだ。綾君がいなのは好都合！

私の目的、それは綾君の部屋に侵入すること。昨日、寝る前に思い出していたのだ。

実は、綾君は攻略対象キャラクターではない！ 綾君はなかなかの人気で、ファンディスク版が出た時には、攻略対象だからうつかりしていた。

それで綾君の役割なのだが、乙女ゲームに時々ある、家族や友達は協力者でしたパターンだ。綾君は攻略対象キャラクターのLEVEL E度を教えてくれる便利キャラクター。ゲームをやつていた当時は、

綾君の部屋に入り浸り、状況確認をしていった。

その機能は健在のはずよね！

問題はどうやって聞きだすか

『綾君、聞きたいことがあるんだけどいいかな？』

『なんだよ、姉貴』

『ちょっとと攻略対称キャラクターの「〇〇×E度を教えてくれない？』

『あ、あ？ 意味わからねえ。こうじやくたいしょうキャラクター  
つて人か？ ラブ度つて何だ？』

『なんていふか、仲良し度みたいな』

『で？ “誰の”が知りたいんだ？』

『今のところ、ノリトさんと高校の数学教師で藤宮フジミヤ  
キヨウ恭先生かな』

『……わかった。直接、聞いてきてやる』

『ええ！ 困るよ。そんなの恥ずかしそぎるー』

綾君に聞きたくなるのも緊張したのに！

『安心しろ。姉貴が結果を知る時には、2人は、もういないから  
それじゃ、いってくる』

『意味深発言過ぎるよ！ “2人は”と、“もういないから”的間に、  
“この世に”って入りそうだからー ちょっと待ちなさい……  
つてもういなーしいー』

現実的に言つて、絶対無理！ ょつて家宅捜索をすることにした。

「私の命のためなんだから、綾君にプライバシーはないわー！」

綾君の部屋に入る。……なんか、思つていたより質素ね。ベッド

や勉強机、本棚とタンスがある畳の部屋。参考書や教科書があつて、脱いだ学ランもきちんと、ハンガーにかかっている。何の問題もない普通の部屋。

問題大有りよー異常すぎるわー！

綾君は中学3年生、思春期のまつ盛り。だといつのに、女性の際どい姿を撮ったポスター や、エロ本どころか、グラビア本もない。そして、漫画雑誌すら1冊もない。

これじゃあ、健全ビンタか不健全だよ。どうしたー綾君！

LOVE度の情報だつてまだ、手に入れてないし。あと探してない所つて、ベッドの下と鍵の掛けた勉強机の引き出しだけ。

鍵があるんだから、開かないと思つて触らなかつたけど、一応、試してみるか！

結果、開いた……でも、開かなければ良かった。引き出しの中に  
は、姉が<sup>ワタシ</sup>写真が、何枚も入つていた。現在の高校セーラー制服（明らかに隠し撮りなもの）から、果ては、乳児期の写真。

綾君、私に何を求めているのよ！？ うう、見なかつた事にしよう。気を取り直して、ベッドの下をあさる。

ベッドの下にH口本があるのは、定石だ。絶対あるに決まつている。手に何かが当たつた。

キタ！ 取り出してもみると、それは

「ノート？」

くたびれたノートは所々、暗赤色にくすんでいる。血とかじやな  
い事を、真剣に祈る。表紙には、“抹殺者リスト／要注意者編”  
と物騒なことが書いてあった。ノートを、恐る恐る開く。

ノートには

藤宮 恭 殺殺殺  
蒼井 則斗 殺

と書いてあつた。

怖っ！ 何なの！？

私が、考え抜いた末の結論を言うと、あれは限りなくLOVE度  
に近いものを示すモノ。私と仲がいい人は、綾君にとつて邪魔なの  
だろう。その結果、この表現が用いられたとか。多分。

でも、そう考えると私は、藤富先生と仲が良いことになつていて  
そんなんに話した記憶ないんだけど？ まあ、知らない間に、変なフ  
ラグ立つていることは、時々ある。注意しないとね。

むむ？ 何かおかしくないかい？ ノリトさんは、ともかく。藤  
富先生は、高校教師である。しかし、綾君は中学3年生。高校と中  
学校の校舎は少し離れた所にある……どうやって調べた！？

疲れきった私は部屋に帰り、布団に入る。今日あつたことを頭の  
中で整理する。収穫は、いろいろとあつた。しかし、（精神的に）  
失つたものが大きかつた。

「なんか、どうと疲れた！」

そう言った私が、眠りにつくのは3秒後のこと。

## 1-0 脣 口常...おひだりここへ下着の話ー? (前書き)

今回は恋愛要素が既無のトワ達の家の口常です。 脣が下着についての話をしています。 脣が暴走しています。 危なくないと私は思いますが、不快だと思つ方は、注意して下さご。

## 1-0 話 田常一・ぬいぐるみの話ー？下着の話ー？

今の生活に慣れ始めた、ある休日のこと。

3時はおやつの時間よね！ 私は、台所からコンビニの菓子パンを入手して、機嫌よく鼻歌を歌いながら、部屋に戻るため、きしむ廊下を歩いていた。その途中で、廊下にある黒電話が、鳴る音がしたので、受話器をとる。

「もしもし？」

「 もしもし、トツさんですか？」

「はい、そうですけど。どちら様ですか？」

「 今日の、パンツは何色？ハア、ハア、」

キタツ！？変態さんからの電話が。まあ、こいつの電話は珍しくない。

私はトリップしてきてから、美少女というものがなつてしまつた。そのため、後ろから知らない人が付いてきたり、迷惑電話が、かかってきたりすることは体験した。美少女は罪ね！なんて最初はアイドル気分で楽しんでいたが、何度もすると、飽きたので電話対応のほとんどは、綾君やノリトさんがしてくれていた。

対応としては、綾君は電話に、ぶち切れ、怒鳴った後に受話器を、乱暴な動作で戻していた。ノリトさんは、笑顔で、呪文？みたいな言葉を話し、電話の相手に精神攻撃らしきものをしていた。そのおかげで、ずいぶんな数の迷惑電話が減つた。

今日せつかり電話をとつてしまつたので、対応する。

今日の私は、機嫌が良いから、ちよつとは相手してあげますか！  
せつから同じ言葉を繰り返す変態さんに意識を戻す。

「 ハア、ハア、今日の……パンツ……何色？」

「今日は確か、ピンクで豹柄よ」

「 ハア、ハア、か、形は？」

「うーんと、なんていうのかしら？」

ボクサー？と答えていると、綾君が鬼の形相で、私の前に走ってきた。そんなに走つたら、床抜けるよ。この家は神社共々、ボロいんだから…

「姉貴！ 誰と話してんだ？」

「えーっと、変態さん？」

「おー、すぐに切れよー普通に対応してんじゃねーよ、馬鹿ー。」

綾君に受話器を奪い取られ、説教を受けた。姉貴がそんな対応しているから、迷惑電話がなくならないとか それは初耳だわ。あの電話を受けると、なんというか。なんというか。

血が騒ぐのよねー……あ、断じて興奮するとかじゃないから！

美少年、美青年を見ると思わず、ハア、ハアしちゃうような同属の血が騒いじやうのよね。私が、29歳まで捕まらなかつたのは、ひとえに、ゲームのキャラ達にしか心を奪われなかつた。そのため、ストーカー行為をする手段がなかつたというだけだ。

今だつて、トリップした乙女ゲームがDearじゃなかつたら、毎日のよつに美少年、美青年を追ひ回すのに…

「聞いてんのか、姉貴！」

「うえ！『めんなさい…何の話だつたけ？』

「変態と句を話してたんだよ？」

「今日のパンツについて聞かれたから、ピンクの豹柄ボクサーって答えただけよ。」

「姉貴、そんなパンツ持つてたか？」

洗濯ついでに、姉のパンツをチェックしているなんて、流石시스コン弟ね！

「私は持つてないわ。綾君のだよ？」

「俺のかよつ！それを変態に話すつて本気<sup>マジ</sup>でありえねーしー！」

だつて、誰のパンツとは言つてなかつたんだよ！と心中で反論する。これを言つたら最後、ものすごく、怒られるに決まつてゐる。29年間の生活で反論したら、倍返しにされるということを学んだのだ。とくに狡猾な姉には、度々、罵にはめられていた過去が大き

く、私を我慢強い子に成長させた。

綾君の説教を右から左に流していくと、ノリトさんが近づいてきた。

「綾くん、何かおもしろ……不思議な話をしていますね？」

普通に素が出ましたよね！？ 面白い話ついでに話しかけていたし…」  
「の腹黒！ イケメン！」

私が心の中で、ノリトさんを罵倒していくと、話が進んでいく。  
「そんな電話があつたんですか。トコちゃん怖かつたでしょうね。  
大丈夫ですか？」

別に……なんて言えないよ！ 言つたら変なフラグ立ちそだか  
らー！ 私が無言でいると、怖がっていると思つたのか、綾君が話を  
変える。

「そつこいえば、ノリ兄の洗濯もしてるけど、パンツとか見たことね  
えな」

「え？ ちやんと毎日出しきまうけど？」

ノリトさんは、そう書いて廊下の窓から見える洗濯物を見る。視  
線の先には、快晴の下に気持ちよさそうに風に揺れる、白く長い布  
？ ……

ふんどし、ですって！？ 今時、萌え業界にも、そんなに需要の

ないものを履かないで！

綾君は気付かないようで、やつぱりなにじゅんと、ノリトさんは不思議そうに見ていた。硬直した私に気付いたノリトさんは笑顔で話しかけてくる。

「トツちゃんはわかつたようですね？」

聞かないで！ セクハラよ…？ と思いつつ、自然とノリトさんの下半身に目がいってしまう。ノリトさんは、何を勘違いしたのか、してないのか話を続ける。

「そんなに僕が気になりなすか？」

「気になつてないわよ…ふんどしに興味があつただけよ…」

「…………」「」

しまつた！ 本音が出てしまつたわ！

3人に沈黙が広がる。その後、最初に口を開いた強者はノリトさんだつた。

「そんなに興味があるのでしたら、僕の……見ますか？」

もう何も言つまい。魂が口から完全に出た私は、遠い田で外を見る。洗濯物が気持ちよさそうに揺れていのところが、再び、目に入れる。その横で、綾君がふんどしをすれば……という不穏な言葉は聞こえてないことにしよう。

その数日後から一時期の間に、洗濯物からボクサー・パンツが消え、干してあるふんどしの数が増えたことなんて、家事を一切しない私は知らなかつた。

1-0話　日常...ついでかっこ~?ト着の話ー? (後書き)

読んで下せつた方、ありがとうございます。

## 1-1話 爽やかスポーツ少年？と厄口！？

いつも通り、遅刻、ギリギリの時間に学校につく。私の寝起きが悪いとか、支度に時間がかかるから、ではない。遅刻をしたくない私は、早くに準備を済ませている。綾君を置いていてでも、家を出てやると思っていた。居間で新聞を読んで、のんびりしている綾君に、先に出ると伝える。

「姉貴の足じや、3時間経つても学校に辿り着けないだろ。黙つて、チャリの後ろに乗つてろよ」

生意気な言葉と、表情のわりに、目は捨てられた犬のように潤み、言葉に元気がない。

「う、言外に一緒に行きたいと言つたじゃない！」

結局、置いていくことができず、遅刻をしたり、しけたりしている毎日だ。

教室に行くため急いでいると、廊下の角から出てきた人と衝突した。私の華奢な身体が、反動で後ろへ傾く。硬い床に倒れる衝撃を覚悟して、目を閉じる。

あれ？痛くない？ いくら待っても衝撃は来なかつた。目を開くと、私は、誰かに抱きしめられていた。

「君、大丈夫？」

田の前には、爽やかな美形男子高校生がいた。私は、この人に衝突して転ぶところを、腕を引っ張つて助けてくれていた、らしい。体格が良くて、男前な美形だなあ、背はノリトさん位か少し上かな？と観察していると、不思議そうな顔で見られる。

「じめんなさい！ 私の不注意でぶつかってしまって……」

「はは、いって、オレも急いで、前見てなかつたし」

そういうと、彼は、私が来た方向へと歩き出す。私、お礼を言いつれていたわ！

「助けてくれて、ありがとー。」

去り行く彼の背中に、言葉を投げかける。その言葉が聞こえたのか、彼は、振り返らないまま片手を上げて、ひらひらと返した。キザねえ……

今、イベント起きなかつた！？ あの人も見たことある気がする。

考え込んで氣のせいだと結論を出した時には、彼の姿が見えなくなっていた。私が、教室へ歩き出すため足を動かすと、何かにつまずいた。足下を見ると、1冊の本が落ちている。

「さっきの人の本かしら？」

拾つて本を見る。表紙には数学？と書いてあつた。数学？ってことは上級生ね。あとで返そうと思い、革の鞄に本を入れる。

教室に入ると、いつもよりも生徒達に、落ち着きがなかつた。生

徒達は皆、何枚かの白い紙を持っているようだ。軽く教室を見回していると、ホスト教師こと藤宮先生が、私を見ている。

「お前、いい度胸だな……俺様の授業に遅刻するのは何回目だ！」

「す、すみません！もうしませんから、お許しを！」

「その言葉を聞いたのは3回目だ。お前は放課後、数学準備室に来い！ わつき、こいつらには、この前やつたテストを返したが、お前のは、放課後に渡す。来なかつたら分かつてんだろうな？」

「田をつけられた！？ もう、全ては綾君のせいよ…」

死亡フラグは、まだ立っていないはずだとは思うが、怖すぎるわ。授業は始まっていたが、すっかり元気をなくし、机に突っ伏した。2時限目が終わって休み時間になり、生徒達はガヤガヤと話にふけっていた。隣の席にいる可憐ちゃんが話かけてくる。

「トワさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわ。先生に呼び出されるなんて最悪よ……あれ？ 可憐ちゃんも元気ないわね？ ビうじたの？」

普段から色が白くて、可愛い可憐ちゃんは、いつもと違い、少し顔が蒼い。思いつめた顔をしている気がする。少しして、決意したように、いきなり動き、私の両手をつかんだ。

「私、私……トワさんにお願ひがあるの！」

「お、落ちついて、可憐ちゃん！ 私でできることなら協力するか

「ひ

「ありがとうございます。……実は今日、学校に来る途中で、変な人に襲われて……」

可憐ちゃんの話を聞く、時々、言葉に詰まる彼女を急かさず、優しい目を向けて話を促す。話を全て聞き終わり、言葉を整理する。

「それで男子高校生に助けてもらつたつことでいいのよね？」

「はい！ そうなのです。とても素敵な方でした」

その場面を思い出したのか、顔をほんのり桃色に染めた可憐ちゃんは可愛かった。思わず守つてあげたくなるオーラを出している。これが庇護欲を誘つてことかしら？ 同時に変態の気持ちも誘つてしまふのが難点よね。私は、可憐ちゃんに気付かれないと、小さく息をはいた。

「助けてくれた人に、お礼が言いたいのです。でも、上級生なので会いに行くのが怖くて……」

「その人は何年の誰かは、わかるのね？」

「はい！ 任せてください！」

そう言つと、可憐ちゃんは制服のポケットから小さな手帳を出す。

「彼は、オオタニ大谷タクマ拓真（17歳）さんです。私たちと同じ高校の2年5組に所属している上級生で、趣味はスポーツです。身長178センチ、体重69キロ。現在の部活は野球部ですが、いろんな運動部

に助つ人として参加しています。家では「ゴールデンレトリーバー」を飼っているようです

」

ええ？ どうしたの、可憐ちゃん！？ いつもとキャララが違うよ！ つていうかその手帳は何なのよ！ 可憐ちゃんは、動搖している私に、追い討ちをかけるように話を続ける。

「 家族構成はいたつて普通の4人家族で弟が1人います。これでわかりました？」

可憐ちゃんの説明を聞いて思い出したが、その人は攻略対称キャラクターだ。知らないはずがない。それに、分からなって言つたら、さつきと同じ内容の説明を、正確にリピートするのでしょうか？

私たちは、昼休みに2年5組に向かうことになった。ついでに中庭で、お昼を食べることに決まり、綾君の手作り弁当が入った、革の鞄を持っていく。

「大谷先輩はいますか？」

2年5組について、すぐに教室の中にはいる先輩に取り次いでもらうため、そこら辺にいる生徒に話しかける。話しかけた男子生徒は、私を見て顔を真っ赤にさせて、2つ返事で大谷先輩を呼びに行ってくれた。……美少女って便利よね。そう思いつつ、教室の中へ入つていた男子生徒を見る。

「 おい、拓真！ 可愛い子達がお前に、会いに来てるぞ！」

「ん？ そなのか？ ちょっと言つてくるわ」

「告白じやなかつたら、紹介しろよー。」

「はは、誰がするかよ。バーカ！」

そう言つて出てきた人は、朝に私がぶつかつた爽やかな美形男子高校生だった。

「あれ？ 君は朝にぶつかつた子だよね？ お礼は聞いたけど、どうしたの？」

「ここの子の方が、用事があるのよ。ねえ、可憐ちゃん？」

可憐ちゃんに話すように促す。可憐ちゃんは恥ずかしそうに前に出て、何度もお礼を言つた。その姿を見ていて思い出す。この人の落し物を渡さないと！ 自分の鞄をあさつていると、キヤー！という悲鳴が聞こえる。可憐ちゃんが、よろけている姿が目に入る。廊下で歩いていた人とぶつかつたようだ。私は支えようと、手を伸ばす。間に合つた！ と安心したのは一瞬で、可憐ちゃんの体重を、この細い身体では支えきれず、一緒にバランスを崩す。

「おつと、2人とも大丈夫か？」

私と可憐ちゃんは、大谷先輩の腕で支えられていた。そして、2人とも同時に大谷先輩から、素早く離れた。可憐ちゃんは恥ずかしさから、この行動をとつたのだろう。私は

これ以上、LOVE度を上げてたまるか！ こっちどう命がかかってんのよ！

そんな心情だ。しかし、お礼はしつかり言つわ。偉いぞ、私！

可憐ちゃんもお礼を言っている。

「ありがとう。助かったわ」

「はは、今日は2人とも災難だな。まあ、じつちは役得だけどえ？ 意味が分からず首をかしげる。大田に先輩は爽やかに笑つて言う。

「ほら、両手に花つてやつ？」

可憐ちゃんは、顔を益々赤くさせていく。私は、無表情に、大谷先輩をじっと観察する。

爽やかは、爽やかなんだけど、なんかイメージが違う？  
変な違和感があつたが、気を取り直し話しかける。

「大谷先輩、朝に落し物をしなかつた？」

「ああ、本を1冊、なくしたんだ」

「これですよね？ 教科書がなかつたら困つたんじゃないですか？」

「君は、中身見てないの？」

その言葉に頷いて、本を渡す。

当たり前でしょ！ 教科書なんか見ても楽しくないわ！

「へえ～、本当に？」

「なんでそんなに聞くのよ。ただの教科書でしょ？」

大谷先輩は、ほらと言いながら、本を開いて見せてくる。その本の内容は、女の人の、ほにやらうな、姿を載せているエロ本だった。

「なんでそんなつ！」

「はは、本当に見てなかつたんだな」

大谷先輩は、全く悪気もなく話す。

流石の私でも、実際に見せられると顔が赤くなる。女にそんな物を見せるな！ そんな物を学校に持つてくるな！

「これは俺のバイブル。授業中に見てんだ、とくに藤宮の授業つて、つまんないだろ？」

やつぱりイメージが違つ！ 大谷先輩はこんなセクハラ親父みたいな性格だつたかしら？

考え込んだ私は適当な相槌をした。その後は、会話を少しして分かれる。昼を食べるために、可憐ちゃんと、中庭に行つた。考えながら食べたせいか、綾君の手作り弁当の味がわからなかつた。

あんなセクハライベントは、ゲームに全くなかつた。ゲームをしていても、大谷先輩は、こんな残念な性格ではなかつたはずだ。もつと普通に爽やかなスポーツ少年で、ゲームを進めるうちに、少しずつ歪んでいったという展開だつた。

Dearの世界に、私が登場したことで、何かが、変わっているの？

私の心には、不安が渦巻く。午後の授業に集中できないまま、放課後になり、帰宅した。

## 1-2話 ホスト教師…回避できない…テスト返却…?

私は昨日、重大なことを忘れていた。

「藤富先生の呼び出しが、もうと忘れて帰ってしまうなんて！」

私の馬鹿…」

学校に来て、教室の席に着いてから思い出したのだ。素早く時間割を確認すると、今日は藤富先生の数学はなかった。安心して息をついた。できるだけ、怒らせないように作戦をたてなくちゃならなーいわ！

素直に謝ったところで許してくれるかしら？

『藤富先生！ ごめんなさい！ うつかり忘れて帰っちゃいましたー。』

『やうなのが、じゃあしようがねえな…』

『そうですね！』

『はははは』 『ふふふふ』

こんなことになるわけ絶対ない！ むしろ

『藤富先生！ 『めんなさい！ うつかり忘れて帰っちゃいましたー。』

『お前は、よほど、俺様の罰が受けたいようなだな？ あ、あ？』

『お許しを！ お代官様！』

『俺様は教師だ！ 今度という今度は許さねえぞ！』

『あれ、藤富先生？ 何処に行くんですか？』

『お前の、この壮絶に悪い点数のテストを、掲示板へ貼つてくれる』

『そんな待つて！ ああ！ 行っちゃった。藤富』

勢いあまつて声がでる。

「 先生の鬼！ 悪魔！ ドラ！」

「ほお～、誰がだ？」

「そりやあ、藤宮先生に決まつて……！」

田の前には、笑顔を浮かべた藤宮先生がいた。ドリヒヒーーー。  
？ 私は、ペシソと氷のように固まる。

「お前、強制連行！」

「いやあああああー！」

必死の抵抗もむなしく。藤宮先生にすらあらぬ反抗され、連行された。どこかの部屋に入つてすぐに、煙草の臭いが鼻につく。キヨロキヨロと見回すと、灰皿に煙草の吸殻が山のように盛られ、プリントや教科書が、つづ高く積まれた部屋であることがわかる。

「藤宮先生！」なぜじですか？」

「見りやあ、分かるだらう。数学準備室だ」

「どーがー？ どうやつても、ただの汚い部屋にしか見えない！

「ほ、他の先生は？」

「なんか知らねえけど、『この部屋は耐えられない』とかで違う場

所にいるわ！」

「」の俺様教師のことだ、他の数学教師の掃除を促す再三の注意を無視して、この自分だけの城を作り上げたのだろう。他の先生達の苦労が目に浮かび、同情していると、藤宮先生に話しかけられる。

「で？ 連れて来られた理由は分かつてんだろうな？」

「せ、せ、せ、先生！ 私は授業がありますので、失礼します！」

身を翻し、扉に向かって歩く。扉に手をかけて、力をこめる。

ガチャ、ガチャ、ガチャ！…………開かないですって！？

後ろから、藤宮先生が無言で近づく足音がする。振り返つて、後ずさりすると、すぐに背中が扉にあたる。扉と先生に挟まれた。左右にさり気なく動こうとした瞬間に、先生の両手にガードされ、身動きが取れなくなる。先生は、私の耳に、顔を近づけてくる。

「俺様がお前を、簡単に逃がすと思つたのか？ よく分かつてないようだから教えるが、今は放課後だ。誰も来ないぞ」

ひいいいい！ やられる！ お父さん、お母さん、先に逝く娘を許して！

「殺すなら、痛くしないで！ 一瞬でお願いします！」

「…………ばあか、何を勘違いしてるか知らねえがな。俺様がこれからするのは説教だ」

「へ？」

思つてもいなかつた言葉に、キヨトンとして間抜けな声を出してしまつ。意外に普通なので安心した。そんな私に言葉を続ける藤宮先生。

「死んだほうがましだと思つ理智後悔させてやる」

普通じやなかつた！？

「長くなるからな、俺様は座る。お前も、せひのソファーに座れ」

逃げられないなら、諦めるしかないわね。ソファに座らうと指定された所に行く……ソファーが見当たらない！ 見渡しても、あるのは書類や教科書などの本の山だけ。

「藤宮先生。ソファーって何処に？」

「あ、あ？ 書類退かせば、そこら辺にあんだろ」

探すと茶色の革張りソファーがあつた。自分が座る分だけ書類を退かし、周りの教科書などが崩れないように、慎重に座つた。

「おい、最初に、この前のテストを返すぞ」

返された5枚のテストは、悪くない点数だつた。苦手な英語も29点であつた。0点は免れた。それなら、怒られるのは遅刻のことかと、身構える。

「そのテストを見て、思つことはあるか？」

「セイヒの点数だと思います」

「点数はな。他には?」

先生が言いたいことが分からぬ。首を傾げながら藤宮先生に聞く。

「問題があるよつこは見えませんけど」

藤宮先生は大きさに溜息をついて、煙草を吸い出す。

「名前だ。な・ま・え!」

「何も問題ないじゃないですか!」

「「Jの阿呆が! 名前の欄に“れんじょうじ= Tom au um a =トワ”ってなんだよ! まず、お前は小学生じゃないんだから苗字くらい漢字で書け!」

「ようがないでしょ! あのテストの時は、この世界に来て2日目だ。簾穂寺なんて難しい漢字が書けなかつた。そこは多めに見て欲しい。」

藤宮先生のほうを向くと眉間に皺をよせて、3本目の煙草に火をつけている。

「他にもあるぞ。Jの英字の部分は、ローマ字だな!」

「はー、やうです」

「 さうか、じゃあ、お前の名前を書つてみろー。」

「 簾穂寺=トウルーマ=トウです」  
〔ねんじょうじ〕

「 そのテストにトライアウトマットで書いてあんだらうがー。」

ぐつ！ 私は英語が昔から苦手だった。ローマ字で书く、できなかつた私が、努力の末、この名前を書いたが、“トウ”と伸ばす文字が分からなかつた。苦肉の策で、これを書いたのだから、むしろ褒めて欲しい。

「 お前は自分の名前すら书けねえのかー。」

「 すいません……」

私は、“佐藤 永久”だと书く、違う世界から来たなんて言えるわけがない。言つたら、頭がおかしいと思われるだろう。本当の自分を知つている人がいないなんて、つらい。私がしつかりしないと、佐藤永久が消えてしまうような気がする。悲しさで涙が、滲んでくる。

「 おー、泣くな。罰として、自分の名前を1000回を书いたら許してやる」

鬼！ 悪魔！ ホスト！ と心中で唱えながら、名前を书いた。その間は、藤宮先生の説教は続いていた。その後、手の感覚がなくなつたころに、終わつた。窓の外を見るとい、日が沈んで、真っ暗だ。

「 それじゃあ、藤宮先生。帰ります」

「おい、待て」

「まだ何か、あるんですか？」

「お前を送る」

「どうせ、暗闇暗殺ルートだらう。誰が行くか！」

「いりません。遠慮します！」

「お前に拒否権はない、黙つて着いて来い。」

数学準備室に連れてこられた時のように、引きずられて行く。連れてこられた場所は、職員用の駐車場だった。夜遅いせいか、1台の車しか残っていない。

「このド派手な赤いスポーツカーは藤富先生のですか？」

「あア、カッコいいだろー。今日は特別に乗せてやる。嬉しいだろ？」

？

嬉しくないです。なんて、口が裂けても言えない。

ド派手な車に乗せられた。家には自転車で10分しかからないのだ。我慢よ、私！ 我慢してれば、すぐに到着するだらう。車がゆっくり動きだす。

「おい、簾穂寺。家に行くのは、コンビニによってからでもいいか？」

「私に拒否権はないんでしょう?」

そう言つと、藤宮先生は運転のため前を向いたままだつたが、楽しそうに口角を上げて言つ。

「可愛くない奴だな」

「うつ! 今の藤宮先生は半端なく色氣があつて、思わず見惚れてしまつた。

コンビニに着いて、藤宮先生が買い物をしている間、私は車で待つていた。先生は、数分も経たずに戻つてくる。コンビニ袋の中に目がいく。中にはサキイカとビールが2本しか、入つていなかつ。

ホストな見かけだから、シャンパンとか飲んでそうなのに。身体に悪そうな生活してそうな所は、そのままだが、予想以上に「親父くさい……」ボソッと声を出す。その声が聞こえたのか、藤宮先生は

「大人なんだよ。お・と・な

「私だつて、藤宮先生と同じ年だからわかる。これは、駄目な大人だ。」

「藤宮先生、夕飯はそれですか?」

「別に腹が減つてねえから、いいんだよ。文句あるか?」

「それで身体を壊さないなら、いいんじゃないですか?」

私が本当の女子高生だった頃なら、注意の1つや2つしていただろうが、大人になつて自分も似たような生活をしていた。人様にどうこう言つことはできない。それに藤宮先生は、他人に干渉され、怒るような思春期は終わつただろうが、いい気はしないと思う。大人になれば、全て自己責任だ。

「藤宮先生のしたいようにすればいいと思います」

藤宮先生は私の家に着くまで、無言のまま運転をしていた。沈黙が支配した世界は、ひどく気まずく、息がしづらかった。家の近くに着くと、車を止めてくれた。先生にお礼を言つて別れた。

鳥居をくぐると、明かりの点いた家が見える。夜のボロ神社と木造の日本家屋は、昼と雰囲気が違い、不気味さが10倍はあがっている。そこに、ちょうど良く風が吹いて木の葉が、ザワザワという音もしてくる。

人がいる？　お、お化けじゃないよね！？

逆光でよく分からぬが、家の外で人が立つてゐるのが見える。近づいてみると綾君が立つていたことが分かった。

夜は気温が下がつて寒いといつのに、私を待つてくれたんだろうか？

「ただいま

「お帰り、姉貴」

「外で待つていてくれたの？」

「別につ、姉貴を待つてたわけじゃねえ！…………あんまり、心配させんなよ」

綾君は田をそらして、慌てていた。ツンデレな綾君のことだ、最初の言葉は、逆の意味で聞けばいい。これは絶対に待つてくれていた。でも、シスコンな綾君は夜遅くなつたら、心配で学校に迎えに来ると思っていた。

期待していたのに…………そつ思つて気付く。私は何を、期待したんだろう？

## 13話 美人神主と私が巫女！？

意識が浮上してくるのが、ぼんやりわかる。カーテン越しに朝の光を受け、布団で寝返りをうつ。この、うとうとしている時が、一番幸せよね。今日は休日だから、私の安眠を邪魔する人は誰もいない。再び襲ってきた睡魔に身をゆだねる。それから数分経ったかもわからないうちに悪夢を見た。

ぐ、ぐるしい。重い……悪霊にでも取り付かれたのかしら？

お腹に人が乗っているみたいだ。ギュウギュウとお腹が、締め付けられる痛みが強くなる。耐えられなくなつた私は、目を開いて、がばっと上半身を起き上げ、状況を把握する。

「……ちよつと……痛い、痛いわ！　どいて下さい！　ノリトさん！」

目の前には、私の腰に、渾身の力で抱きついて、締め付けていた神主服を着たノリトさんがいた。ノリトさんは顔も、私のお腹にうずめて、子供みたいだ。この力が強くなれば。

「ノリトさん……内臓が……出ちゃう、出ちゃうわ！」

「トワちゃん、トワちゃん！」

私がぐつたりした頃に、やっと解放してくれる。瀕死つてこうことなのね、と悟りを開いていると、ノリトさんが私の両手を持ち、顔を近づけてくる。いつもの笑顔がない、相當に焦っているみたいだ。

「トツちゃんにお願ひがあるのですけど、いいですか？」

「わ、私にでえれ！」となら……」

あまりの迫力に頷く  
なんで、頷いちゃったの！私のお馬鹿！

「これをして欲しいんです！」

ノリトさんは、「ソソソソと懐から巫女服を取り出す。無理やり持たされた服は、

生暖かかった。

もひ、そんな所から出さないで、全然、嬉しくないから！微妙すぎて、ぞわつとしちゃったわよ！

「何で巫女服なんて、着ないといけないんですか！？」

「そ、それが、参拝者が多くて、僕一人だけでは、どうにもならないんです！」

「はあ！？あのボロ神社に参拝者って、どうしてですか？」「利益をくれるどころか、逆にもってかれそうな勢いの神社じゃないですか！」

「僕にもよくわからなくて、朝の掃除に行つたときには、わらわらと、もう沢山いたんですね！助けとトセー、トツさん……」

そんなG様がでたよに言つのは、どうかと思つわ

「む、無理ですか？」

私が巫女服を着て行ったところで、どうにかなることは思えない。むしろ、混乱させる自信がある。それに、そんなイベントに首を突っ込みたくないというのが本音だ。

「そうですか……どうしても無理だというなら……」

ノリトさんは、いきなり雰囲気が変わる。いつも腹黒そつで、何かを企んでいる笑顔に変わる。私は、後ずさりしながら聞く。

「む、無理だといふなら？」

「Iの体操着、ブルマセットを着てください！」

なんで、その2択なのよ！？ 絶対に嫌！ 絶対に着たくない！

「巫女服はわかるけど、なんの関係があつて体操着なんて着る必要があるのよ！」

「僕が元気になります！」

その言葉を聞いた私は、ため息を吐いて脱力する。結局、神社を手伝うことになってしまった。

なれない巫女服を、時間をかけて着る。鏡で見た自分は、イギリス人の父親の血が流れている、この外人顔な美少女の姿と、巫女服は、違和感がありまくりだった。

「スプレにしかみえないわ。

準備が終わり、ノリトさんと家の外に出る。外は、境内を埋め尽くさんばかりの人人がいた。とくに女人達が多い。私と一緒に出了ノリトさんを、アイドルのように目を輝かせて見ている。この人達はノリトさん目当てだ、ということは一発でわかった。

巻き込まれ損よね……

女人達は、ノリトさんの隣に立つ私を睨みつけている。数少ない男の人達は、顔を赤くさせている。

あんまり見ていると、観覧料とるわよ！

そう言つてしまいたい。我慢、我慢よ！ ノリトさんは、私を引張つていく、人の山が綺麗に左右に分かれて道ができる。連れてこられた場所は、売店のような所だった。

「トワちゃんは、ここでお守り、絵馬、破魔矢、お札などを売ってください」

私が了解する前に、ノリトさんは小走りで、どこかに行つた。それからは、最初は勝手がわからず、おろおろと対応していたが、仕事をしていったときの勘を取り戻すと、難なく対応ができた。

お昼を過ぎる頃になると、人の数が落ち着いてくる。しかし、私は息つく暇はなく、売店は男性客が殺到していた。迷惑なことに私は熱狂的なファンができてしまったらしい。客が物を買つごとに握手を求められる。

私は、どこのアイドルよ！？

頭が、ブツツンする直前に、ノリトさんが売店に入ってくる。話しかけたいが、男性密の相手をする。

「あ、あのね<sup>お</sup>うつと絵馬を合わせて880円です。」

「おうつと絵馬を合わせて880円です。」

代金をもらつた後に、握手を求められる。手を出さうとするが、ノリトさんが、私の隣に来て、休憩をするように言った。その後で、男性密と話しあう。

「お密さん、今なら破魔矢が、安いですよ。いかがですか？」

男性密は、美人なノリトさんが笑顔で、押し売りをしているのに気付かず、逆に顔を赤くして嬉しそうにしている。鼻の下も伸びきつている。

男性密さん、気付いていますか？　ノリトさんは男ですよ！？　知らないうちが、幸せってこともあるし……放つておいで。

「それじゃあ、矢を一本下せ……」

「ありがとうございます。破魔矢は、後日に送りますので、住所を教えて下さー」

「は、はー。郵送ですか？」

「いえ、直接、あの世へ　お届けいたします」

「へ？」

「なんでもあります。素早く確実に送りますから、心配しないで下さい」

せりき普通に、『あの世に』って言わなかつた！？ 素早く確実に送るとか、怖すぎますよ、ノリトさん！？

ノリトさんは笑顔で男性客を丸め込んだ。その様子に不穏な空気を感じ取った他の客も、蜘蛛の子を散らすようにいなくなつた。売店には、ノリトさんと私の2人だけが残る。突然、ノリトさんが話しあ出す。

「はあ、駄目ですよね……」

「な、何がですか？」

ノリトさんは意味深発言が多くて、どの1ことを言つてこのかわからないわ！

「トトちゃんに僕以外の男性が、近づいてくるのを見ぬといライライしてくるんですね」

何と言葉を返していいのか分からず黙る。『氣まずくなる雰囲気の中、ふつと頭に重みを感じた。ノリトさんが、私の頭を優しく撫でてくれている。

「トトちゃん、今日は本当にありがとうございました」

「あ、別に大丈夫ですよ。困った時はお互に様ですから、いつで

も言つて下さい」

「今まで社交辞令が得意な日本人なんだ、自分！　言つてしまつた言葉に後悔する。ノリトさん、空氣を読んで、正確に遠慮して！　と思つが、伝わらなかつたようだ。ノリトさんは、それじゃあ、あと一つだけと言つて、言葉を続ける。

「トトちゃんにお願ひがあるんですナビ、こいですか？」

笑顔で朝と同じ言葉を繰り返すノリトさんに、『ジャブ』というより、違和感を覚える。笑顔が腹黒いわけではない、心が入つていなといといふか元気がない、空っぽな感じだった。

「私にできる」とならこいですけど……なんですか？」

「ありがとうございます。明日、赤岡とこうお寺で、お墓参りに行つて欲しいんです」

「お墓参りなら、ノリトさんが行つたほうがいいんじゃないですか？」

「はい、本當なら、僕が行かなきや行けないんですけど、どうにもお寺の坊主に嫌われていて、行くとまづきを振り回されて、すぐに追い出されてしまつんです」

「へ？　何で、ですか？」

首を傾げながら聞く。

「最近、こここの神社が人気なのが気に入らないらしくて……困つた

ものですか

「そ、うなんですか。……す、いません。このボロ神社に来ても、もう、たばっかりに、お墓参りに行けなくなるなんて」

「謝らないで下さい。僕がここに来ることを、選んだんです。今だつて、後悔していません。可愛いくつちゃんの、傍にいられるのですからね」

「う、う、さつきから口説き文句があざですからー。対応に困るからやめてよー」

「……それで、誰のお墓参りに行けば、いいんですか？」

「蒼井百合 僕の妹です」

一瞬、時が止まった。その女の人は知っている。ゲームでも名前が出てきた。故人でありながら、今後に大きな影響を与える特別な人。

「妹さんのお墓参りなら、ますますノリトさんが行つたほうがいいじゃないですか！」

行くといつたら危険度の高い、ノリトさんルートが濃厚になってしまふ。でも、断つたら別の死亡ルートがでてくるはずだ。

「明日も休日で、参拝客が多いと思いますから、神社からは離れません。命日に、どうしても、花だけは供えたいんです。お願ひします」

決め手は、ノリトさんの真剣な言葉だった。私は覚悟を決めて頷く。もう、どうでもなれという気持ちだ。

どうちも危ないなら、進むしかないわ！

ひつして、私はノリトさんの、妹さんの所へお墓参りに行くことになった。

## 14話 百合と私とお墓参り？

花束をノリトさんに渡される。その花は、清潔感に溢れた白い百合の花だった。

「妹と同じ前年の花です。あの子は、その花を一番、好んでいました」

「わうなんですか……綺麗ですね」

ノリトさんは昔を思い出しているのか、優しく微笑んでいる。その姿は、朝の光に溶けていきそうで優しく、百合のように綺麗だった。

私は、百合さんのこと何も知らないことになつていて。だから、今の彼にかける言葉がない。もし、私が言葉をかけたとしても、何も変わらない気がする。いつもテリケートな問題は、この歳になつても、対応ができない。無言で百合の花を見つめていると、ノリトさんは、いつもの笑顔に戻り、何を考えているのか、分からなかつた。

近づいて来るわりに、自分の心には踏み込ませないつて感じよね

「それではお願ひしますね」

「……はい、任せてくれこ」

バスを2回乗り換え、3時間半経った頃に、百合さんが眠つているお墓のあるお寺に着いた。お寺は、私の家にあるボロ神社よりは、

ましだが寂びれていて静かだった。ふと、ノリトさんの言葉を思い出す。

最近、こここの神社が人気なのが気に入らないらしくて……

お寺に人気を求める坊主とは、どんな人なのかしら？

ゲームでは、声優も絵すらもないモブキャラクターだった人よね。考え方をしていると、坊主らしき、お年寄りがいたので話しかける。

「すいません、お坊さんですよね？ 蒼井家のお墓ってどこにありますか？」

「なんじゃあ？ 別嬪のお嬢さんは、……あのボロ神社の色男の恋人かのう？」

まじまじと観察されるような視線にイラッとする。しかし、お墓の場所を聞くまでは、顔に出すわけにもいかない。

「……ただの知り合いです」

「どうだかのう、あの色男は人を惑わせる物の怪のような奴じゃ！ わしの寺の檀家さんが、何人消えたか。わしの寿命が50年は縮んだんじゃ！」

今、お迎えが来ても大往生じゃないですか！ おじいさん！ なにちやっかり、自分の寿命延ばしているんですか！？

「あのハゲ！ 自分で探したほうが、絶対に早かつたわ！」

愚痴に付き合つ」と2時間後、やつと場所を教えてもらい早足で移動する。そこは、お寺の一番遠い所だった。お寺の中心には立派な墓が並んでいたが、離れる”とに質素なものが増えていく。目的の場所が見え、歩く速度を落とす。……人？ ブロンドの髪、スリーツを着た男の人人がしゃがんで手を合わせているのが見えた。

「……藤富先生？」

その言葉が聞こえたのか、男の人は振り返つて私を見て、一瞬だけ目を見開き驚いていたようだつた。やはり、男の人は藤富先生だつた。

「簾穂寺か？ こんな所で何してんだよ」

何つて、ここに来たらお墓参りしかないと思つんんですけど……

「蒼井 田舎さんのお墓参り……」

「田舎の？ 知り合いなのか？」

「ノリトさん……田舎さんのお兄さんに頼まれたんです」

「つ、則斗さんが？ 今、あの人はどこにいるんだー？」

藤富先生に両肩を？まれ、強く揺さぶられる。手に持つていた花束が、がさがさと一緒に揺さぶられ、花弁が2～3枚散つた。

「ぐつ、藤富先生！ 落ち着いて下さい！」

「あ……簾穂寺……悪いな、取り乱しちまつて」

私の言葉に、我を取り戻した先生は、手を離して、バツが悪そうに顔を下に背けた。私は、花束を抱えなおし、百合さんが眠るお墓を見る。小ぢなお墓には、先生が先に備えた、白い百合の花があった。

私もノリトさんから預かつた、花を供えて、手を合わせる。

「先生は、百合さんとお知り合いなんですか？」

藤富先生は、じつと百合さんの眠るお墓を見た後に、煙草を取り出して火をつけむ。少し間があいて、話し出す。

「百合は…………俺の婚約者だった」

「…………そつなんですか」

空気が、重い。私は、どうしたらいいの？

「…………そつこえ巴、藤富先生はノリトさんの居場所を、知らないんですか？」

「則斗さんは、百合の葬式後に、連絡がつかなくなつた……住んでいた家も売り払つて、ずっと行方がわからぬ」

「ノリトさんは私の家にいますよ」

「は？」

キコトンとして、私が何を言つてゐるのか分からぬといつ顔を

した藤宮先生。もつ一度同じ言葉を繰り返すと、やつと理解していくように、そつか、と言つて手を伏せた。

「……おい、連穂寺。もつ日が暮れてきたから送る

「へ？ 別に一人でも帰れますよ」

「黙つてついて来い」

藤宮先生に引っ張られ、赤いド派手なスポーツカーに乗せられる。先生は、私の家に着くまで始終無言で運転していた。家の近くになると、車が止まり、先生が車の扉を開けてくれる。

「藤宮先生つて、普段は乱暴なのに、変なところで紳士ですよね」

「そういうことは黙つているのが、いい女だぞ」

少しの間視線を交わし、2人で同時に笑った。藤宮先生は、今まで見たこともない顔で、子供のように素直に笑っていた。気まずい雰囲気がなくなる。

「こういう切換えが早い所は、大人よね……

「それじゃあ、俺は行くから」

「藤宮先生は、ノリトさんに会わないんですか？」

「俺は、今まだ、則斗さんには会えねえ。もう少し……心の整理がついたら来る。則斗さんはすぐにいなくなつたりしないだろ？」

「多分、そうだと思いますけど」

その言葉を聞いた先生は頷いて、帰つていった。車を見送った私は、鳥居をくぐる。このボロい神社にも、もつ慣れた。

そんなに時間は経つてないはずなのにね  
?

ふと視線を感じた方向に田をやると、ノリトさんがほつきを持つて立っていた。

「ノリトさん、ただいま」

ノリトさんは私の方へ無言で近づいてくる。

「うわっ！ いきなり、抱きしめられた。ほつきが転がる音が響く。

「お帰りなさい、トツちゃん」

「の、ノリトさん？」

どうして？ わけが分からぬ。混乱して動けない私を、抱きしめる力が、強くなる。

「今日は妹の所へ行つてもらえて、助かりました。ありがとうございます」

それだけ言つと、ノリトさんは、ほつきを置いてきます、と言いつて離れる。

「つー」

その顔を見て、鳥肌が立つ。恐怖で、逃げたい気持ちが強くなる。ノリトさんの笑顔は、目だけは笑っていなかつた。

背を向けて歩くノリトさんの姿が見えなくなるまで、目が離せなかつた。

ノリトさんはあんなに冷たい瞳で笑う人じやなかつたのに……

## 15話 蒼井 則斗視点・宝物に告ぐ?

### 14話の蒼井 則斗視点

彼女には妹に会つて欲しかった。僕の大切な家族に

落ち着いた色の服を来たトワちゃんは、実際の年齢より大人びて見えた。彼女はもともと大人びた雰囲気を持っていたが、今日は一段と大人のようだ。

彼女に白い百合の花束を托す。

「妹と同じ名前の花です。あの子は、その花を一番、好んでいました」

「そうなんですか……綺麗ですね」

生きていた頃の妹の笑う顔が浮かぶ、と自然に微笑てしまう。同時に、虚しい気持ちにもなる。

「それではお願ひしますね」

「……はい、任せて下さい」

彼女を見送った後、神社の管理を行つ。昨日よりは、人が多くなりことに、ほつとした。

妹の命日になると思い出す、昔のことを

よくある悲劇を見せられているように、僕の生活は、音を立て崩れていった。

崩れていった。

蒼井百合は、僕のたつた1人の家族にして、最愛の妹だつた。

両親は、僕が19歳の時に死んだ。2人して、車中で練炭を使って心中したらしい。その連絡を警察から聞いた時には、“やつぱり”としか感じなかつた。もともと、僕や百合は、空気のように扱われていた。2人にしてみれば、生きてればいくらいの認識だつただろう。

入学したばかりの大学をすぐに辞めて、沢山の仕事をかけ持ちして働いた。若かつた僕は、たいした給料も稼げずに貧乏だつたが、小さなアパートで百合と2人で幸せに暮らしていた。他のものは何もいらないかつた。

間違いなく、百合は俺の宝物だつた。

僕が26歳に、百合が21歳になつたある日、百合は恋人を連れてきた。軽薄そうな男は、藤宮恭といつた。初めは反対したが、百合の一生懸命さに、藤宮の真摯な態度と、交際を許した。

それから3年後の春に、百合は死んだ。交通事故だと聞いて、会社の上司に断り、病院へ急ぐ。慌てていたため、よく分からなかつたが、電話では、藤宮が運転する車が崖から落ちて、助手席に乗っていた百合も重症だと言つていた。百合が心配で、不安を隠せない。

病院についてから受付で百合の病室を聞き、行つてみると、頭と左腕に包帯をした藤宮が椅子に座つてするのが見える。藤宮は下を向いている。

「百合は？」

僕が藤宮へ詰寄ると、無言で首を振る。

「田舎が死んだ？」

「嘘だろ……」ビーッ

「…………」

「なんでお前だけが生きているー？」

「妹を、田舎を幸せにするって言つたじやないか！！！　お前が  
お前が、死ねば良かつたんだ！」

「…………」

「なんで、なんでお前は何も答えない！」

藤宮は、何も答えなかつた。病室に行き、顔にかけられた白い布  
をゆつくり捲る。その顔を見て絶望する。目の前が、真つ暗になつ  
て何も見えなくなる。頭に浮かんでくるのは、今日の朝に会つた最  
後に笑つていた姿だけ。

「神なんていない　　僕は、あの瞬間から神といつものを感じ  
なくなつた。」

病室から出てきてからも、藤宮は、何かを言つ事も、涙を流す事

もなかつた。藤宮を何度も殴る。病院の職員に止められたままで殴つた。

認めない お前が、妹を愛していたなんて。

落ち着いてからは、いろいろな手続きをしたり、百合の葬式をしたりで瞬くように過ぎていった。これ以上、あの男とは関わりを持ちたくない僕は、海外に出た。

目的もなく、放浪としていた。

偶然だつた、トワちゃんの両親に、話しかけられたのは。日本人が珍しかつたのだろう。家族の怠慢など様々な話をしてくる。適当に相槌をうつていただけなのに、どういう話の流れか、僕に、神社の管理者になつて欲しいという話もしていた。

興味がなかつた。しかし、トワちゃんの両親が出したのを見て……

つー?

その写真をみて、目が離せなくなる。百合に似ている……そう思つたのは、一瞬だつた。よく見ると、容姿も何もかも、百合とは違つた。ただ、纏う雰囲気が近かつた気がした。トワちゃんに興味を持つた僕は、神社の管理者になることを承諾した。

日本に戻つてきて、すぐにトワちゃんに会つたが、写真と雰囲気が180度も違つていた。写真では、内気そうな印象だったのに、実際の彼女は生命力に溢れていて活発な子だつた。

妹と完璧に似ていない……

正直言つて、がっかりした。せつかく、日本にまで帰つて来たのに、彼女にはとつては理不尽だろうが怒りを覚えた。だから、腹いせに、この子で遊ぼうと思つた。

僕が近づくと大抵の女は顔を赤くさせるのに、彼女は顔を蒼くさせる所も、僕を怖がつてゐるだろうに、からかうとすぐに怒る所も面白かつた。何もかも、他の子とは違う彼女に惹かれていた。ただの興味が好き変わつて、それから彼女を愛しいと思うのに時間はかからなかつた。彼女で、遊ぼうとしていた自分を殴りたいくらい反省している。しかし、そのおかげで彼女を知ることができた。彼女の前では自然に笑える。

僕は、いつの間にか、新しい宝物を手に入れていた

命日には、百合のお墓参りに行きたかった。でも、僕から妹を奪つた男がいるかも知れない。それだけで、僕の足が動かなくなる。妹に会つて欲しいと思つたのは嘘ではないが、怖くて、憎くて……彼女に頼んでしまつた。

考え事をしながら仕事をしていると、すぐに夕暮れになつてしまつた。

「あの……」

人もいなくなつたと思っていた境内に、1人だけ残つていた少女が話しかけてきた。

「なんですか？」

「とても素敵な神社ですよね。私、ここに来ると落ち着くんです」

「ありがとうございます。それでは僕は、神社の掃除がありますから失礼します」

とりあえずお礼を言つて、去ろうとする

「待つて下さる……鳥居のほうに、結構、木の葉が落ちていまし  
たよ」

「はあ？ そうですか、行つてみます。伝えて下さつてありがとうございます」

少女は付いて来ることはなかつた。僕は、鳥居の近くに着くと、トワちゃんが見えたので、声をかけようとしたが、やめた。彼女と話している人間が見える。

何故、あの男がいるんだ？ 彼女と一緒に……

僕が、見間違えるはずない、この魂に刻んだ憎しみと怨念が、藤富を忘れたりはしなかつた。しかし、あの男を殺したいと思う程、憎んでいたというのに……僕の身体は動かなかつた。目が行くのは、彼女が楽しそうに、あの男と話している姿。それだけなのに、名も知れぬ黒い感情に飲まれる。

あの男は、百合を失つても、まだ笑うことができるのか。

男は、再び、僕から大切なモノを奪おうとしているのか。

許せない

許セナイ

ユルセナイ

「ノリトさん、 ただいま…………え？」

近づいてきた彼女を、腕の中に閉じ込める。

「お帰りなさい、トツさん」

「の、ノリトさん？」

腕の力を、強くすると彼女の身体が強張るのが分かる。

「今日は妹の所へ行つてもらえて、助かりました。ありがとうございます」

その後、ほうきを置いてくると言つて、彼女が怖がらないようこ  
笑顔を作つた。彼女から離れ、掃除用具入れの倉庫へ、歩く。

「ふふふ……」

何故か気分が高揚して、笑えてくる。何もかも、悲劇だったはずなのに。

「今度は、必ず守つてあげるからね……」

僕の宝物トキヲノハヂマツ

2人で一緒にいよう?

僕から君を奪う“男”は全て排除してあげるから

「ねえ? それくらい許してくれるでしょ?」

僕から宝物トキヲを奪つた神様

この世界に、君と僕以外いらない。

これから、君のための喜劇を

?話 名もなき男?の日常!? (前書き)

本編のシリアルスリラー展開に耐えられなくなつた作者の暴走作品です。ただのストーカーの話です。不快だと思う人は注意して下さい。お願いします。 本編と全く関係ないです。

?話 名もなき男?の日常!?

一田惣です。簾穂寺＝トウルーマ＝トワという女の子を見て、ビビッときてしまつたんです！

道行く彼女を見た瞬間に、天使が舞い降りたのかと思つた。その後は、授業に行くのもやめて、迷わず彼女の後ろから付いて行く。

もううんこいつそりと！

それからというもの、彼女の情報収集をしまくつた。小学校時代から大人しい性格の子で、あだ名は、“大和撫子”というらしい。ふむふむ。

双眼鏡を使い、学校でお昼中のトワたんを見る。

おつほー！ よく見えるぞ！ 双眼鏡を作つた奴、グッジョブですよ！

トワたんは女の子なのに、胡坐をかいて、ご飯を食べている。

大和撫子……？ ぎゅ、ギャップ萌えつす！

つていう一かスカートがもう少しで、みえ

ブツー！

鼻血が出て、前が見えなくなつた。

無念じや……

トワたんが、歩く道は「」を避け、小石を避ける毎日。

「の道をトワたんが歩くとは。ハア、ハア。

トワたんの家は神社、回りは茂みで隠れる場所が多い。

ひつそつと木陰に隠れる」と、忍者の如し！

「わやああああああ……」

俺の悲鳴ではない。「の声は、俺の同志もどきA」の声だ。あの鬼畜美人神主にやられたらしい。上手く隠れられない奴は、やられる。

全く阿呆な男だ！

トワたんが神主と話をしている。

「ノリトセ、わしき悲鳴が聞こえませんでした？」

「ふふふ、氣のせいでですよ」

「氣のせこじやありません！ そいつは鬼畜ですよ、離れてえ！」

わう思つてこると、トワたんがいなくなつた。

「さあて、変態のお方、出てきたほつが身のためですよ」

ギクッ…！

出でつたほうがいいのか！？　おどおどしていると、ガサガサと音がする。見ると、同志もどきBが出つていたらしい。

お前いたのかよ！

「ぐわああああ！」

あわわわわ！　口から心臓が出てくるかと思つた。

出なくて良かつた！

壮絶な最後を迎えた同志もどきBに敬礼！

抜き足、差し足で逃げていると

ぎゅはつ！

顔の横に『』が刺さつていたよ、はい。それを見てダッシュで逃げる。

ちつ、逃がしましたか……という美人神主の声が聞こえた気がする。

次の日も、ゴミ拾いと小石拾いに精をだす。

これが俺の、ストーカーの献身。

## 16話 命の危機？家があああ！？

「ふふふふ～ん」

私は今、某ヒロインのよつこ午前中から、シャワーを浴びている。ピチピチの若いお肌は洗いがいがあつていいわ。機嫌が良くなつて鼻歌が出てしまつた。もちろん覗きなんていない……はず。

身体を洗い終わり、脱衣所で服を着る……つて、この服何！？

見ると、用意しておいたパジャマはなく、白い襦袢が置いてある。こんなもの置いた覚えはない。綾君は、こんなことしない。残るは……

「ノリトさん！ ビーですか！？ パジャマを返して下せ～！」

とりあえず襦袢を着て、走りつと身体を動かすと、ふらつとして目が霞んだ。どうやら、貧弱なこの身体はシャワーを浴びただけでのぼせて立ちくらみをしたらしい。脱衣所の壁に手をつく。

カチッと鳴る音がした後、黒い物体がショットと勢いよく、目の前に出てきた。

「はあやーーー」

見ると壁から槍が突き出している。

……なんで、槍が壁から飛び出してくれるのよー。先端は鉄製の槍

は、とても鋭く、落ち着いてみてからも肝がヒヤッとした。

「Jの家は、ただのボロ平屋じゃないの？ というか、乙女ゲーム  
枠越えて、ファンタジーに入つてない！？」

対策しようと思つても、綾君にこの家のこと聞いたら、本当の姉  
じやないつて、ばれるから聞けないし……もしかしたら、変な死亡  
フラグが立つてゐるかもしない。とりあえず、LOVE度を確  
認しとかないと！

綾君の部屋の前に来て、綾君が居ませんよつにと祈つてからノックをしてみる。

「あ？ 誰だよ」

「うー！ 居たのか、KYOUな弟め……ひつじゅつかと、これから  
展開を考えていると、綾君が田に入る。出て来た綾君は、私を見て  
時間が止まつたように動きを止める。

「え？ 綾君、どうしたの？」

「……Hロ……」

ボソツと綾君が呟く。

「へ？ 綾君、よく聞こえなかつたよ。もう一回囁つて……つて、  
おーい！ 戻つて来てよ」

綾君は聞こえてない様子で、まだ動かないでの、顔の前で手を振

つてみる。

「はーー、ビ、どうして、そんな格好してんだよ。」

「そんな格好つて……あ、この襦袢のことに、似合つ。」

「わ、悪くはねえけど、そのペチャayanina胸じゅ、話になんねえーな」

「なんですかー？」

「ぺちやんこひつぱつたんだよ」

「ぬぬぬー、禁句を言つてしまつたわねー、地味に傷つくな……仕返ししてやる。

「…………綾君…………コンクスの『DXモンブランパフ・チヨコ』  
ートがけシロフの氣紛れ盛り』が、食べたい……買つて来てくれる  
?」

「はあ? ポンクスつて家から、2時間もあるといつあるパンダー  
だろ? なんで俺が……」

もう一度、じと皿を加えて言つ。

「……DXモンブ

「だああー、わかつた、買つてくるから。大人しくしてろよ。」

甘いわね、綾君!」

「コンペ二に行く綾君を見送つてから、隙あり！ と部屋に侵入する。

ベッドの下から“あのノート”を取り出して見る。

藤富 恭	殺殺殺殺
蒼井 則斗	殺殺殺殺殺殺
大谷 拓真	殺

何度見ても怖いわね……といつか、ノリトさんのLOVE度が上がりすぎている！ ヤバイわ！

「」はもう、安パイ狙いで藤富先生か、大谷先輩とくつつくしかないの？ いや、大谷先輩が、ちょっとゲームの時の性格と違ったから、危険な気がする。

「」の先どうなるんだっけ？

僅かに戻ってきた、あやふやな記憶を搔き集めて考える。

ノリトさんは本当の意味で食べられちゃうルートあるのは絶対よね。藤富先生はなんだつたかな？ 俺様な性格で世界征服的なことをやりかしていた気がする。大谷先輩は、監禁？……

自分の命は大切だけど、監禁されてまで、生かされるのも嫌だし。

自分が幸せだからって、他人が不幸になつても良いなんて思えない。

殺したいくらい好きだとかとか、自分だけのものにしたいから監禁するとか、好きな人のために周りを犠牲にするなんて、このゲームの登場人物は本当に歪んでいる。

でも、現実の人間よりも、人間らしい気もする。今は、何故そう思うのかもわからないが、そのうち分かる時が来るかもしねり。

考えすぎて、気持ちが暗くなる……あれ？ Dearって攻略対象キャラクターは3人だけ？

「少な過ぎるわよね……」

まだ出てきてないキャラクターもいるはずだし、その人が比較的に、まともであることを祈るしかない。

「とりあえず、ノリトさん以外の人と関わってみようかな……」

気付くと、綾君へ買い物を頼んで2時間が経とうとしている。鉢合わせないよに、部屋を出て廊下を歩いていると、声が聞こえる。

「姉貴、帰ったぞ！」

「綾君、お帰りなさい」

綾君を出迎え、頼んだものをもらつて、食べるため居間に移動する。綾君は、部屋に戻つて行つた。

「美味しい！ 濡けちゃうわ！ 頭を使った後は、これよね！」

のんびり、テレビを見ながら食べると、綾君が走つて居間に来る。

だから、そんなに走つたらボロい床の板が抜けちゃうよ！

「おい！ 姉貴、俺の部屋に入ったか！？」

ドキッ！

ば、ば、ばれたあああ！ どうしよう……

本当のこと言つたら

『綾君の部屋に入ったわ』  
『どうしてだ』  
『……は、入つてみたかつただけよ』  
『机の引き出しは見たのか？』  
『し、し、知らんぜよ』  
『…………』  
『ふうん、姉貴は昔から嘘が下手だな……見たんだな』

ぐはっ！ これは、ばれてしまふ確立高いわ！

「姉貴！ 入ったのか？」

走つてきた時より落ち着いた綾君は、私の目をまっすぐ見て、聞いてくる。

「入っていないわ。綾君の部屋なんて、これっぽっちも興味ないもの」

「…………」

私の言葉を聞いた綾君は、シロンとして、見えない尻尾が垂れ下がった気がする。

やつちやつた！ 気まずいわ！

誤魔かすよつて、綾君に話しかける。

「どうして、そんなこと聞いてきたの？」

「…………俺の部屋にこんな本が置いてあって……」

綾君の手から本を受け取つて見る。その本は

H口本やないか！？

はつ！ 驚いて大阪弁になってしまったわ。綾君の部屋を捜索した時は、1冊も見つけられなかつたのに！

「……これ、綾君のでしょ？」

「ぱつ！ 違えよー！」

綾君が、おろおろとして視線を彷徨わせる。

落つついで考えてみると……姉が弟の部屋にH口本を置くとか、絶対無い！ むしろ、疑うほうがおかしい。私がやってないなら、

「んな」とするのは

「ノリトさんが置いたんじゃない?」

「は? ノリ兄がなんで?」

「知らないわよ。後で本人に聞きなさい」

疲れたあ! パフェを食べるのを再開する。

「う~、やっぱ美味しい!」

「お~、姉貴。チョコが口の周りについてる」

「う~」

言われた場所を拭ぐ。

「馬鹿、違えよ……ったく、しょうがねえな」

そう言つて、綾君は少し笑つてティッシュペーパーひとつ口の周りを拭いてくれる。

「う~、照れるわ。それを誤魔化すように話す。

「ありがと~……綾君も食べる?」

「まつ? 何言つひんだよー?」

「綾君が買つてくれたし、御礼だよ。ほら、あーん

最初はうつらえていた綾君も、暫くして諦めたのか口を開く。スプーンを口に入れようと、手を動かすと

「ドッカーネン！－ 」といつ衝撃音と地震のよくな揺れが起つた。

「何事！？」

驚いてスプーンを皿に落とし、慌てて右往左往とする私と、スプーンをじっと見ているが、落ち着いている綾君。

そんなんに、パフェが食べたかったの？と思つてみると、綾君が話し出す。

「多分、 “あれ” だな」

「あれって何よ？」

「子供の時にも何回があつたろ？」

その過去を知つてゐるの、私じゃないですから、本<sup>マジ</sup>氣で知りませんから！

綾君の後ろについて、音のしたほうに行く。綾君は、誰も使つてない部屋に入つて行つた。その部屋は、畳だけあって、家具も何もなかつた部屋だったはずだ。

部屋の中に入つて目に入ったのは……階段？

地下に続く階段が、その部屋にはあった。前に見た時に、絶対になかった、この危険スポットは、綾君は、迷わず地下に入つて行く。私も、恐る恐る軋む木の階段を降りる。

地下は埃っぽいが、広い。下にいたのは  
「やつぱつ、ノリ兄か！」

「どうしてこんな所に、ノリトさんがいるんですか？」

「トトちゃんに綾くんじゃないですか。いやー、この家が面白こので探索していました」

「ここと楽しそうな感じがします。

いやいやー、槍が出てきたり、変な地下が出てきたりする家のどこが楽しいのよ！？ 每日、命の危機じゃないの！

心の中で、つっこんでいると、綾くんが話しだす。

「この家は、俺たちの何代か知らねえが先祖が、建てたカラクリ屋敷なんだ。何とかっていう神仏の像を守るために、いろいろ細工してあるんだよ」

「このボロ平屋がー？」

「普通に生活していく、命の危機を感じるなんて嫌よー。建て替えないの？」

「姉貴、忘れたのか？ 建て替えようとして、下見に来た業者が数人、犠牲になつて逃げてつただろ？」

知らないわよ！

「僕は好きですけど」

聞いてないわ、ノリトさん！

「この家の事はいいとして。ノリ兄！ 僕の部屋に、この本を置いていったら！？」

本を片手に、ノリトさんに詰め寄る綾君。

「ああ！ その本を置いたのは僕です。どうでしたか？」

「見てねえよ！ なんでこんな本を置いたんだよ！」

ノリトさんは、一瞬だけ目を私の方へ向けた。笑顔のままだったが、雰囲気が氷のように冷たく、部屋の温度が下がった気がする。

「僕は、そろそろ綾くんに“姉離れ”をしてほしいんですよ」

「はあ？ な、な、何を言つてゐるんだよ！」

綾君は、顔を赤くして、拳動不審になる。

「姉弟は、いつまでも一緒に居られないんですよ」

ノリトさんの言葉は、綾君に向けられているような、私に向けら

れているやつな、不思議で空虚な響きをもつていた。

綾君は赤かった顔を青くして、手をギュッと握り締める。少し間が開いた後に、ボソッと声をだした。

「…………わかつてゐる」

ノリトさんにも、その声が聞こえたのか、笑顔を柔らかいものに変わる。

「理解してもらえて、良かつたです」

それだけ言つと、ノリトさんは階段を上つていった。

私も、綾君にかける言葉が見つからず、部屋に戻った。

窓からは橙色の光が入つてくるのを見てだいぶ時間が経つたことに気つく。もやもやした気持ちを感じながら一日が終わった。

どうしてこの世界は、現実より息苦しいのかな？

## 17話 爽やかな部活と……え！？

今日も学校が終わり、帰り支度をしてると、隣の席に座る可憐ちゃんに声を掛けられる。

「トコセー、」のあと窓こでますか？」

「えいと、ヒリしたの？ 可憐ちゃん」

「実は……放課後には大谷先輩の部活をしてくる所を見学したくて、トコセーと一緒に歩いて欲しいのです」

あの爽やか美青年の先輩の所に……

迷つたが可愛い可憐ちゃんのお願いに、断り口とせでさすに首を自然に縦に振った。

「ありがとうござります。わたくし野球部のいるグラウンドに行きましょ！」

ふわりと笑つた可憐ちゃんに手を引かれて早足で歩く。学校の单调な廊下の角を2回曲がった所で可憐ちゃんの足が急に止まり、後ろにいた私も慌てて止まった。

「可憐ちゃん？」

声を掛けても反応がなく、可憐ちゃんの視線の先を追つ。そこには、2人の男子生徒がいた。1人は柄の悪そうな3年の先輩で、もう一人は眼鏡を掛けた小さな男子生徒。床には大量のプリ

ントが散らばっている。聞こえてきた話し声で、柄の悪い3年生が眼鏡の生徒に一方的に絡んでいるようだ。

「てめえ、ふざけんなよ！ 僕にぶつかっておいて、ただで済むと思つなよー。」

「す、す、すみません！ 僕の不注意で……」

「すまねえと思つてんなら土下座でもなんでもじろよー。このボケ眼鏡がつー。」

「……こいつは、どこかのヤクザか不良だ。呆れを通り越して、もはやどりでもよくなる。」

「うう、ほ、本当にす、すみませ……」

眼鏡の生徒は今にも泣きそうにながら謝り、土下座をしようとすると、その姿をみると流石に止めて上げるのが人情かと、2人の男子生徒の間に立つ。

「あら、何をなさつているのかしら？ 嘘嚙んでしたら先生をお呼びしましようか？」

声を掛けると、柄の悪い3年はプリントを踏みつけ、すぐにいなくなつた。残る眼鏡君に、視線を向けるとおもいつきり横に顔ごと目をそらされた。眼鏡で表情は見えずらいが、耳が真っ赤になつている。眼鏡君は、近くで見ると意外に背が高い。背中を丸めて、下を向いているせいで小さく見えていたようだ。

何故かフリーズした眼鏡君を不思議に思いながらも、可憐ちゃん

に協力してもらひにプリントを全て拾つた。そして、再び、眼鏡君に話しかける。

「大丈夫?」

眼鏡君はビクッとした後に、プリントをぎりぎり手つきで受け取る。

「れ、れ、れ、簾穂寺さん!..」

「はい、何かしら?」

「す、す、すみませんでした!」

眼鏡君は、ダッシュでいなくなつた。

何に対して謝つていたのだろう?

考えていると、可憐ちゃんが隣にきて、可愛く首をかしげる。

「トワさん、どうしたのですか?」

「最近の若い子って難しいわね……」

「ふふ、トワさんだって十分若いのに変なの」

そういえば、若返つていたんだけど他人事のように考える自分がいることにそつとする。

早く元の世界に帰らなくてはいけないわ

グラウンドに着くと野球部の練習が田に入る。しかし、肝心の大谷先輩の姿はなかつた。

がつくりしている可憐ちゃんを慰め、帰れりとグラウンドに背を向け帰る。すると、走ってくる背の高い爽やか美形男子学生の姿があつた。

大谷先輩は、可憐ちゃんと私に気がつくと、田の前で止まった。

「えつと、君たちはこの前の……とーちゃんど、かーちゃん?」

「先輩……何ですか！ そのネーミングセンスは！？ とーちゃんと、かーちゃんってなんか親みたいだから！」

「え？ トワちゃんはとーちゃんで、可憐ちゃんはかーちゃんのほうがわかりやすいだろ！」

「それ以前の問題よ……」

爽やかに笑つてゐるこの男を殴りたいと思つた。大谷先輩の発言に時々、イラッとするのは私だけ？

大谷先輩は、同級生らしき野球部員に呼ばれる。

「おーい、大谷！ 遅えよ！ 女口説いてんなよ！」

「そんなんじゃねえつてのー！」

「じゃあ何してたんだよ？」

「……やつきまで寝てた

「しょうがねえ奴だな！ 速く来い！」

「了解！ 2人ともゆっくりしていけよ」

大谷先輩は、爽やかな笑顔と言葉を残してグラウンドに向かった。

⋮  
⋮  
⋮  
⋮

見学をしてわかったこと、大谷先輩は部活をしているほうが、格好よかつた。時間を忘れて部活が終わるまで野球を見入っていたら、空は暗くなっていた。大谷先輩が近づいて来る。

「2人ともまだいたのか？ もう暗いし送つて行くぜ

「あら、そう？ 私は大丈夫だから、可憐ちゃんを送つて行つてくれる？」

なんたつて可憐ちゃんは一度、変態に襲われかけたのだ。絶対に守つて欲しい。

「とーちゃんだって危ないのは同じだろ。 2人とも絶対に送るから行くぞ」

可憐ちゃんの家のほうが近いから1番に寄つた。その後、2人で無言のまま歩く。沈黙が気まずいので大谷先輩に話しかけてみる。

「部活している大谷先輩は格好よかつたわ」

「そつか……俺に惚れた?..」

「いいえ」

反射的に答えた。

「ははは、真顔で即答つて、とーちゃんは厳しいな」

会話しながら歩いていると、ふと大谷先輩の顔が曇る。

「……先輩?」

「とーちゃん……あのさ、なんか後ろからつけられてる」

「えつー!」

「しかも、複数で」

「ど、どうしまじょう?..」

集団でストーカーとか怖すぎー。私は心の中で絶賛パーティク中に  
なる。

「うーんと、ヤッチャおつか?」

爽やかに不吉なことを言つう大谷先輩は、これまた爽やかに笑つた。

「大谷先輩! ここは穩便に逃げまじょう! つて聞いてないしい

！」

大谷先輩は、もう複数の人間と向き合って喧嘩を始めている。相手は殴り合いといつより一方的に大谷先輩が殴りまくっている。

「ははは、弱いくせに、俺に楯突くとか笑える」

「なんだと！ お前なんかではトワ様につり合わない、消えろ！」

「お前がな」

「バキッ！」 大きな鈍い音がして、知らない男が倒れる。

振り返った大谷先輩は先程と変わらない爽やかな笑顔だった。

「とーちゃん、俺強かつたでしょ？」

「怖い、怖い、怖い」 平然と何もなかつたかのように話す、

大谷先輩にノリトさんに近いものを感じる。

「え……ええ、そうね」

「でも今日のことは内緒だよ、俺と君だけのね」

「で、でも……この倒れている人達が話すかもしれないわ」

「ははは、それこそ大丈夫。この脣達の言葉なんか誰も信用しないから」

「……」

「とーちゃん、何か困ったことがあつたらいつでも俺に相談しろよ」

「ど、うし……」

恐怖で口内が乾いて、言葉がうまく出せない。

「う~んと、何?」

「どうして……私に、優しくしてくれるの?」

「俺はね、弱い者の味方だから」

「私は、弱くなんか、ない!」

必死で言葉を紡ぐ。そんな私に、大谷先輩は近づいて来て、目を  
合わせ凝視している。

「君は弱いよ。知らないのかな? 君はいつも、誰よりも怯えた目  
で世界を見ている」

につこうと大谷先輩は優しく微笑む。

「俺と一緒に」

意味がわからなかつた。こんなに喧嘩が強い人と身を守る術がない私、どこが同じなのだろう?

比較的まともだと思っていた大谷先輩は、全くまともではなかつた。

本当に狂っているこの世界

## 18話 先生！何しに来たの！？

あの後、無事に家に帰ることができた。最後に不思議な言葉を残して……

「なあ、とーちゃん」

「何ですか？ 大谷先輩？」

「俺はお前のさ、田の前にいるか？」

いつもの爽やかな笑顔がなく真顔で質問してくる大谷先輩に戸惑うし、言葉の意味もわからない。実は幽霊でしたとか言われても困るし、家の 神社の前で、その話は笑えない。

「どうこいつ」と？

「……やつぱり、いいや。なんでもない。それにして腹減ったな！」

話を逸らして、大谷先輩は、何事もなかつたように普通に帰った。本当によくわからない人だな……

翌日、今日は休日！ 神社の手伝いをするため、朝の5時に起きて、巫女服を着て掃除をしている。拭き掃除のため、外にある水道で、バケツに水を入れて運ぶ。

「よつこいしょ！ うへ、重たい。寒い」

「Jの非力で白い細腕は、今にも折れそうだ。見かけは高校1年生でも肉体年齢29歳とかいう設定は嫌よ。ふらふらしながら運んでいい」と、綾君が近づいてきた。

「おーーー。」

「綾君、おはよう。どうしたの？」

「貸せ」

「へ？」

私に手を差し出して何かを要求しているが、意味がわからない。綾君に何か貸せるものがあつただろ？ とかと考える。

「バケツ貸せって言つてんだろー。田の前でふらふら歩いてんなよ。田障りだ！」

私の手からバケツを奪い、軽々と片手で運ぶ綾君。見かけは、私とそつかわらない、細腕美少年のくせに！ それに、毎度、口が悪いジンデレのシステムめー 手伝うなら普通に言えばいいのに。

イラッとしたが我慢して、先に歩き出した綾君の後を追つ。

「綾君、ありがとうね」

「つー 別にお前のためじゃないからなー。」

綾君は、こんなに朝早くに起きる用事もないのに、Jのところへ

「うことは、絶対に姉のためだ。後姿だから、わからないが綾君は顔を真っ赤にさせているはずだ。

「ソンデレ美少年の赤面とか貴重！ 絶対見るべし！」

回り込んで顔を見ようと早足になつて頑張つたが、綾君の赤面は見られなかつた。その前に、綾君は真顔で何かを見ている。その方向には人がいた。

「参拝者かな？ あの人……」

見たことのある人物だつた。私の通う学校の数学のホスト教師だ。

「藤宮先生？ どうしたんですか？」

声をかけると藤宮先生はぎくりと身体を揺らした。どうやら私達に気がついて、いなかつたみたい。

「お、簾穂寺か！ ちょっとな

少しほつとした表情と困惑したような表情が混ざつて、複雑そうな顔をしている。いつもと違い、歯切れの悪い、もの言いに不思議に思つてゐると綾君が、藤宮先生と私の間に立つ。

「……姉貴、こいつ誰だ？」

「学校の数学教師で藤宮先生だよ

「ふうん、先公かよ。こんな所になんの用だ」

藤宮先生を睨みつけて、敵対心につけ、毛をさかなかた猫のようだ。

「綾君、口が悪いよ。すみません、藤宮先生」

「いや、別に気にしてねえよ。始めて『衆君』」

藤宮先生は、高い身長を利用して、綾君を上から見下し見下ろしている。

いやいや、藤宮先生、子供相手にむきにならないでよ……

睨み合ひの両者に弱冠、呆れつつ話を進める。

「ふ、藤宮先生、本当にどうしたんですか？ 神社に御参りでもないでしょ！」

「まあな……則斗さんに会いに来た」

「ノリトさん？」

「俺なりの、けじめをつけに來た」

そう言つた藤宮先生は、覚悟を決めたような表情をしていた。ノリトさんを探し、藤宮先生の所に連れてくる。ノリトさんは一瞬だけ驚いた顔をした後に、いつもの笑顔に戻る。

「則斗さん、今日は話があつて來ました」

「そうですか……残念ですが、僕は話をする気はありません。帰つ

てください」

取り付く暇もなく、ノリトさんは踵を返していなくなつた。藤宮先生は、追いかけることもなく、それ以上は何も言わず、去つていった。

藤宮先生は大丈夫かしら？ ノリトさんも様子がおかしかつたし

私はどっちにいったらいいの？ もしくは、どっちにも行かなくてもいいのかもしね。ゲームのように選択肢を悠長に選んでる暇はない。

本当に年齢とともにおせつかいさが大きくなつたのか気がするわ

「私、ちょっと先生を見てくるー！」

「姉貴！？」

綾君を残し、肩を落として落ち込む藤宮先生の後を追う。なぜ先生の所に来たかは自分でもわからないが、後悔だけはたくない。追いつくと藤宮先生は止めてある赤い車の前で、煙草を吸っていた。

「藤宮先生、大丈夫ですか？」

「……予想はしていたが、実際に拒絶されると堪えられないな。時間じゃ、解決できねえこともあるんだな」

藤宮先生の表情は暗い。落ち込んでるところ悪いが聞きたいこと

がある。

「でも、何を話したに来たんですか？ 今更じゃない」

「そうだな……本当の話をしたに来た」

「本当の話？」

「あの時は、話せなかつた。話す勇気がなかつた  
ば、お前、剛斗さんと親しいのか？」

「普通の家主の子供と居候の関係よ」

こやなり違ひ話を振られ、どうでもいいノリトさんのいたずらを  
思ひ出してしまって、むきになつて刺々しい言い方になつてしまつた。

「そうか、親しいんだな」

藤宮先生は苦笑しながら、煙草を道路に捨て踏みつける。

「ううとー、ゼニをどう取ると親しいことこの結論になるのよー？」

弁明をしようと口を開くが、藤宮先生が先に話しが出す。

「これからライブに行く

「へあ？ 気をつけ？」

「お前も行くんだよ。乗れー！」

「うむ…」

誘拐同然に車の助手席に押し込まれて、女の子らしからぬ声が出てしまったがしそうがない。せめてもう少し女の子らしくと思い、おしゃとやかに足を斜めにして座る。藤宮先生はまったく気にしないようだが……

藤宮先生は、車を無言で走らせてくる。適当に走っているのではなく、どこか目的地があるようだった。

「藤宮先生、どこまで行くんですか？」

1時間程たつたところで、我慢できずに質問する。車は山を登り、どんどん人通りがなく、他の車も見えなくなっていた。藤宮先生はバックミラーを落ち着きなく、何度も確認している。

「……事故現場だ」

「田舎さんの？」

「ああ、楽しくはないが、昔話を聞くか？」

「……」

「これはきっと大切な選択ね

物語を左右する重大な選択肢。生き残れるかどうかの選択の一つ。

私は……頷いて答える。

「聞かせてください」

藤宮先生は、前を見て運転しながら、ぽつぽつと話しおした。

「あの日は、天気が悪くて、雨が降っていた。百合が前日、急にドライブに行きたいと言い出して……俺も用事がなかつたから、車を出した」

過去・藤宮恭視点

大学の講義が終わり、友人に軽く挨拶してバイトに向かう。先月から始めた新しいバイトは家庭教師。高校生の教科は簡単で給料はいいし、教師を目指す俺にはうってつけのバイトだ。一つ問題を挙げるとすると、教え子が女子高生だということ。デリケートなお年頃、少し間違えればセクハラと言われる。

「…今は全くそんな考えはないんだがな…」

今日は、数学のいくつかの公式を覚えるまで書かせ、その後は応用を正解になるまでやらせた。

「恭先生もう無理！ 覚えられないからー。」

「文句を言つ暇があつたら公式を唱え続けれー。」

「唱えるとか魔法！？ 数学つて人智を超えているのー！？」

「 $\int f(x) + g(x) dx = \int f(x) dx + \int g(x) dx$   
 $x - a * f(x) dx = a \int f(x) dx \dots$ 」

「あやー、やめてえー！」

「今言った公式を100回紙に書きながら唱えひ。来週までの宿題だぞ」

「鬼！ 悪魔！ ドラ！」

「……わざわざの宿題について訂正する。100回書きながら畳み  
る」

教え終わると、母親がお茶とケーキを持ってきて話しだす。

「藤田先生、ひかりちゃんは頑張つてお勉強していますか？」

「ええ。お母さん、愛さんは優秀ですよ。これなら、すぐにテスト  
の点数も上がりますよ」

「この家のびのびと過ごしている教え子にフレッシュナーをかける。

「ちよつ、恭先生何言つて「まあ！ 本当に… 愛ひかりす」とわ  
ね」「……」

適当に話を終わらせ、玄関で靴を履いていると母親に話しかけら  
れる。

「藤田先生、相談があるのでけど」

普段おつとりした笑顔を浮かべている母親とは思えない沈んだ表  
情をしてくる。重要な相談であると判断して、向きなおり真剣な表  
情をつくる。

「何か？」

「実は……愛ちゃんが最近、ストーカーをねてこないじへつて

「ちゅうとママやめてよー。あれは気のせいかもしれないし」

自信なさ氣に、言葉が尻すぼみになつていいく。

「どうじゅうじとだ？」

「えっと、最近、気がつくと誰か知らない人に見られてて……でも、でも気のせいだと思うのー。だってあの人、女人の人だつたしー。」

女が女のストーカー？ 変に思いながらも、家の戸締りをきちんと行うことと、歩くときには人通りが多い場所を選ぶなど、いくつかアドバイスをして帰った。

夜中2時過ぎにレポートが書き終わり、寝支度をしていると電話が鳴る。こんな時間に何のようだと画面をみると恋人の名前が表示されているのを見て急いで出る。

「もしもしー、じゅしたこんな時間になんかあつたのか？」

「あー！ 恒くん、やつと出でくれた。心配したんだよー。何回かけても連絡取れないし」

心配？ 僕は百合に何か心配されるようなことをしたか考えたが、何も浮かばない。

「それで何か用事でもあつたのか？」

「酷い！ それが心配して電話した恋人に対する言葉ーー？」

何度か謝つて、許してもらえた。今日の百合せりともおかしい。何かに焦つてこらぬつけな、今にも泣き出しそうな不安定さがある。

「恭くん、明日つて言つても今日なんだかドートーしたいなー。ドライブにしまじゅう? 16時に恭くんの家に行くから、行き先は私に任せとー。じゃあ遅くに電話して」めんなさい。お休みなさいー!」

百合は言つたい事だけ言つとすぐ電話を切つてしまつた。今日は用事もないし、百合に会えれば、何がおかしいのかもわかるかと聞くつづく。

田が覚めると、時計が12時を指していた。随分、寝たなと思いながら服を着て食事をする。いつも通りにだらだら動いていと、16時になり百合が家に来た。白いワンピースは、曇り空のせいか濁んで見える。

「恭くん、『めんね。無理やり約束しちゃつて……』

「俺も暇だつたし、気にするな。お兄さんにはやんと書つてきたのか?」

俺は、百合の兄 則斗さんに嫌われている。とこつか、認められない。父親代わりでもある則斗さんは百合のことが心配なのだろう。

「うふ。データだつて、血鹽しきあやつた

則斗さんの不機嫌な顔を思い浮かべて、少し落ち込みながら百合を自慢の真っ赤なスポーツカーに乗せる。

「それで、どこに行きたいんだ？」

「きれいな夜空が見えるところがあつて、そこに行きたいの」

「今、曇ってるだ。雨が降りそつじやないか？」

天気予報は見ていないが、どう見ても晴れそうにない。

「大丈夫。これからきっと晴れるわ」

百合は笑顔で自信がある様子だつた。そのなかと、深く考えずに百合の誘導で車を走らせた。2時間程、走ると大粒の雨が降り出した。山を登り続けて、道路の左、ガードレールの奥は断崖絶壁と言わんばかりに高所まで来た。

「百合、今日は帰らないか？ 晴れそうもないぞ？」

「大丈夫よ。それより恭くん、家庭教師をしているのよね？」

「ああ、まあな。給料はいいな」

「……あの子、可愛いわよね。私より若いし、明るくて友達も多いし、あの子が好きなの？」

「おい、百合？ どうしたんだ？ あの子は、ただの教え子だろ」

突然、泣き出した百合に混乱しつつも車を止めようと減速してウ

インカーを出す。

「ひっく、うん。車、止めないで、もう少しで着くから……もう少しで」

「百合、本当に昨日から変だぞ」

「『』、めんなれこ。お父さんとお母さんの命田が近くなると、自分  
が抑えられないの」

百合の両親が心中したことは知っていた。なんとも言えない気持ち  
になる。百合は、ポロポロと涙を流す。雨脚もどんどん強くなつ  
て視界を奪つ。

「恭くんが女と話しているのを見るの嫌なの。離れていても他の女  
といいか心配なの。恭くんが  
好き、好き、好き」

「百合?……」

「ねえ? 恭くん。好きだよ。好きだから……一緒に死んで?」

お父さんとお母さんみたいに笑顔で、そう言いながら百合は助手席から手を伸ばし、おもいつきりハンドルを左にさる。ブレーキを踏んだが間に合わず、車はガードレールを突き破つて、崖を転がり落ちていった。

## 20話 先生！先生！！（前書き）

俄然。ドロドロ……

回想終わり現在：主人公視点に戻ります。

## 20話 先生！先生！！

藤宮先生に過去の話を聞いた。

「病院のベッドで目が覚めて、百合はもういなって……」

「警察には話したんですか？」

昔を思い出して疲れた表情をした藤宮先生は、少し老けて見えた。

「言わなかつた。いや、言えなかつた。何を言つても、車は全焼して証拠はない。それに、俺自身が信じたくなかった。百合が死んだこととか、俺と心中しようとしたこととか、頭がいっぱいだ……」

坂の途中で、車が止まつた。道路に他の車は通らないので車が止まつても問題なかつた。

「俺のハンドルミスで警察は片付けた。当田は、大雨で視界が悪く、俺は操作を誤つた。事故で頭を強く打つたせいで記憶が曖昧になつているつてな」

藤宮先生は車から降りて後部座席から、百合の花束を出してガードレールの側に置く。私も、車から降りて花を手向けたところに手を合わせた。

「百合にも毎年、花を供えに来る」

「あの今更なんですけど、どうして私を連れてきたんですか？」

「今にわかるや。でも前もつて言つなり、俺はお前に謝んなきゃな」

意味がわからず、首をかしげる。

「餌にしちまつて悪かつた」

それだけ言つと、藤宮先生は今来た道を睨む様に、皿を細めて見ていた。

数分もしないうちに黒い普通車が走つてくる。運転席に乗つているのは、富司の服を着たノリトさんだった。

「ノリトさん……」

車から急いで降りてきたノリトさんは、私の体を触つて怪我がないのか確かめる。

「トツちゃん、無事ですか！？ 良かつた」

「私は大丈夫ですから！ 藤宮先生の話を聞いてください」

ノリトさんは嫌そうに顔を歪めて藤宮先生を視界にいれる。

「何を聞かされたかは知りませんが、トツちゃんはあの男に騙されているんです！」

「則斗さん！ お願いです、話を聞いてください！」

藤宮先生が必死にお願いしても、ノリトさんは頭を縦に振らない

所かおかしな」とを言つ始める。

「トワちゃんも、この男が好きなんですか？」

「じ」となく焦点の合わない田をしたノリトさんは、急に笑顔を取り戻す。

「しようがないですね……あなたが田舎を崖から落とした、事実はそれだけですよ」

ノリトさんは穏やかな顔で崖の下を見つめながら、藤宮先生に近づく。やつと話しを聞いてくれそうな雰囲気になったノリトさんこそ、藤宮先生は肩の力を抜く。

「…………」  
ドスツ――　一瞬の出来事だった。

ノリトさんは藤宮先生の背後に回りこみ手刀をさめる。油断していた藤宮先生は、田を見開いた後、ぐったりと意識を失った。

驚いて藤宮先生の所に駆け寄ろうとするが、ノリトさんに手首をまれ傍に行くことはできなかつた。

「藤宮先生――！　ノリトさん、離して――」

「トワちゃん……君が、悪いんですよ」

ノリトさんは、乗ってきた黒い車の後部座席に私を押し込む。そして、どこからか取り出したロープで私の両手を縛る。おまけに、前の座席、伸び縮みする首の金属部分に丁寧に固定されて動けなくなされた。

「少し待つていて下さいね。すぐ終わりますから」

「ノリトさん、何をする?」

ノリトさんは、私の額にキスをして母親が子供に向けるような優しい笑顔で頭を撫でる。

「いい子ですから、大人しくしていて下さい」

ノリトさんは黒皮の手袋をはめると、藤宮先生に近づく。後部座席の窓から見ているしか出来ない自分にイラッとする。

ノリトさんは、藤宮先生の靴を両方脱がせて、丁寧にガードレールの側に揃える。

まさか　まさか、嫌な予感がする。当たらないで欲しい。

藤宮先生の身体を楽々と担ぎ上げたノリトさんは、迷いなくガードレールの方へ歩き　　迷いなく藤宮先生を崖に落とした。

「藤宮先生……いやああああああ……」

ゆっくり落ちていく藤宮先生を、私は壊れたように叫ぶことしか出来なかつた。

落ひてこく藤富先生こ、開かない車のドアを必死に叩く。

藤富先生！　ビックと身体が痙攣して、田が覚める。

夢？　リリゼー……？

布団じりじり物の上で横になつて寝ていたらしく、ぼんやりと周りを見渡す。薄暗い部屋は湿気が強く、かびの臭いに眉を潜める。身体を本格的に動かそうとするが、全く動かない。

え！　これが噂に聞く金縛り？！　幽霊が出ないでよ！

ギュウッと田をつぶる。少しだと、何かが近づいてくる気配がある。

「田が覚めました？」

知つてゐる声がして、田を開ける。田の前には、火の点いたランプを手に持つたノリトさんが私を見下ろしていた。ランプの眩しさに田を細めて、慣れるまでの時間もなくノリトさんが話し出す。

「あの後、トトちゃんは車の中で眠ってしまったんですよ。覚えていませんか？」

あの後……ノリトさんが、藤宮先生を崖に落としたのは夢じやなかつたのね。

「先生はどうなつたの？」（先生はどうなつたの？）

声が出ない！？

間抜けな自分の声に驚いて、ノリトさんを見ると「ハーハー」と楽しそうに話します。

「トワちゃんが眠っている間に、ロープで縛つておきました」  
口にガムテープを貼つて、身体を

「少し可哀想だなとは思つたんですよ。だから、テープは粘着性が強いものを選びました。ロープは動けない程度にしか縛つていませんし！」

いやいや、駄目でしょうね！

ノリトさんは、他にも何か話をしたあと、木で出来た梯子を上つて部屋からいなくなつた。

ランプは置いていってくれたので部屋は明るい。明かりがあるだけ少し安心できる。落ち着いて脱出方法を考えた。

## 考えた結果

脫出無理！

ロープでぐるぐるに縛られていては梯子も上れないし、声も出せないので助けも呼べない。早々に考えるのをやめて、木造の狭い部屋を見回したが、何もすることがなく飽きた。

藤宮先生は、死んじゃったわよね。あの高さだし……私も死んだら、もとの世界に帰れたりしないかな……ん？　あの木目は人の顔みえるわ。あつちは、お魚に見える。

木目を見るのが楽しくなつてきて天井を見終わると、『ぐぐぐ』寝返りをうつて壁を観察する。

壁の低い位置に傷があることに気がつく。よくみると誰かが書いた落書きのよつてで相合傘に汚い字で名前が書いてあった。

『あや／＼とわ』

これは……子供の時に書いたのかな？　それじゃあ、『いはガタッ！

天井で大きな音がして、ノリトさんが戻ってきたのもしれないと、耳を澄ませる。

「ノリ兄！　姉貴がいなくなつて！　姉貴の先公が事故で！」

綾君の声！

「落ち着いて下さい、綾くん。どうこういとですか？」

「今朝、姉貴は先公を追つていったまま帰つて来ねえんだ。それで、

探してたら話が聞こえてきて姉貴の先公が車で崖から落ちて意識不明の重体だつて！ 姉貴も一緒に車に乗つてたかも！」

噂では藤宮先生は車で事故つたことになつてゐるのか……でも、生きているんだ良かつた。

少しだけ肩の力が抜けたところで、氣づく。2人の声がこんなによく聞こえるなら、私のうめき声でも届くはず。

「もうですか……生きて……」

「ハハハハ…ハハ…（助けて！ 綾君！…）」

精一杯声を出して助けを求める。

「ノリ兄？ 何か聞こえねえ？」

「床下にハクビシンでもいるのじょ。それより、今はトワちゃんを探す方が先です。僕はあの男が運ばれた病院を探して、一緒に彼女が居ないか調べます。綾くんは彼女が居そうな場所を、もう一度探して下さい」

「わかった」

ドタドタと綾君の足音が遠ざかっていった。逆に近づいてくる足音がする。梯子を降りながらノリトさんが話し出す。

「トワちゃん、聞こえましたか？ あの男はまだ生きているみたいですね。あの男は下等な虫のように君の周りを障りにうろちよろして……」

ノリトさんの距離を取るため、部屋の隅にズリズリと下がる。

「トロちゃん、何でこちへ来ないんですか？」

「ハハハハ…ハハハ…（近寄らないで！ 危険人物！）」

ノリトさんは、私の言葉がわかつたのか梯子の側に立つたまま近づく気配もない。

「はあ、僕は君のことをとても大切に扱っているのに……あの男が生きているせいですね。どこまで邪魔な男」

「トロちゃんは僕が守ります。ここには、僕の部屋の下にある地下室ですから、誰も来ませんから心配しなくてもいいですよ」

君は僕だけ見ていればいい  
そう言って、ノリトさんは梯子を上つて行つた。

さつと、藤宮先生の息の根を止めに行つたのだろう。今度こそ、確実に……心配はできても、どうすることもできない。

音のない部屋で眠りに誘われるのに時間はからなかつた。ぼんやりと壁の落書きを見てから、瞼を閉じた。

## 22話 視点・藤宮 田覚め

視点・藤宮 恭

恭くん。もう無理しなくてもいいんだよ。

田舎?

恭くん。田を開けなくてもいいんだよ。現実はつらいでしょ?

田舎はもう……これは夢か……

恭くん。いい出すと一緒にいよ!

田舎……すまない。俺は、俺は生きていたんだ。

恭くん。ゆ……ない。……ゆ……かない。

田舎?

許さない!

はつと田が覚めると見知らぬ天井が田に入る。ボーッと見ていくと、段々記憶が鮮明になっていく。

「簾穂寺…ぐつ…？」

勢いよく起き上ると全身に激痛が走る。

「いやあ肋骨が何本かいつてんな……へそつ、簾穂寺は無事なのか？」

激痛が落ち着くのを待ち、必死に体を動かす。痛みから汗がじわっと出て白いシーツにシミを作る。ベッドから降りようと足に力を込めるがたえられず鈍い音とともに床に倒れこむ。

「つひつ……」

「ははは、何か面白そつな」としてんな。虫の息つて感じ、藤宮センセイ?」

「誰だつー?」

まつたく気配のなかつた部屋に、背後からいきなり声がして驚き振り返る。

「そんなに怯えないでよ。敵じゃあないからさ」

「お前は……」

田の前にいたのは俺が教えている学校の制服を着た2年の大谷拓真だった。大谷はこんな状況だといふのに、いつもと変わりなく笑っている。

「どうして大谷がここにいる?」

「それよつと、もうすぐここへ戻ってとかいう奴がくるぜ」

「つ 則斗さんが！？」

「やうやく、めっちゃ困るわってるからウケちゃった。早く逃げたら？ あと、病院の裏にある中野公園に行つてみればいいと思うぜ」

「Jの部屋にいたことや、則斗さんがもうすぐ来ることを知つていいことなど、大谷は不可解なことが多すぎて動く気にはなれなかつた。大谷は呆れたようにわざと大きなため息をついてみせた。

「大人つて頭固くてメンドイな。とーちゃん ジゃなくつてトワちゃんがあんたのせいで行方不明になつてんだから、早く助けてよ。彼女弱いんだから」

「簾穂寺が！？」

「俺一人なら殺されてもしようがないが、簾穂寺を餌にしちました責任はとらねーと！」

裏の公園を目指すため足を引きずりながら、病室を出る。大谷はついて来ることはなかつたが、最後にみた表情は哀愁ただようような微妙な笑顔だつた。ナースステーションの前を過ぎようとした時

見知つた顔を見て柱に隠れる。

「すみません。藤宮恭のお見舞いに来たのですが何号室ですか？」

看護師に話しかけていたのは則斗さんだつた。

「『』家族の方ですか？ 藤宮さんは5日たっても意識が戻つてないんです。会つても話はできませんよ？」

俺は5日も寝ていたのか！

その事実に驚きつつ、隠れている間にも痛みがじんじんと身体に響き冷や汗がたれる。則斗さんは俺に気づかず、通り過ぎ俺は中野公園を両指した。

公園につくと眩暈がして近くのベンチに倒れこむように座った。意識が朦朧としながらも、血が服に滲んできたことに気づく。

「ここに何があるってんだ？ 大谷にかつがれたのか？

「おいつ姉貴の先公！ 姉貴をどこにやつたんだよー？」

呼びかけられ、目を向けると簾櫛寺の弟が走ってきた。

大谷は簾櫛寺の弟が来ることを知っていたのか？

「居場所は知らないが、誰といふかは知っている。とりあえず、場所を変えるぞ」

周りを注意深く見渡しながら移動する。だいぶ公園から離れたところで、弟が焦れたように話だす。

「それで姉貴は誰といふんだよー！」

「簾櫛寺は則斗さんと一緒にいるはずだ」

「はあ？ ノリ兄と？ そんなはずねえって、ノリ兄は俺と一緒に

姉貴探してくれてんだぞ！

頭に血が上った弟が、俺の胸倉を掴みに睨んでくる。普段の俺なら軽くいなしていたが、怪我のせいで体がどうにも鈍い。

まったく、若いな……その血を分ける。

「くっ！」

格好悪く、呻くと弟がぱつと手を離す。何かをじっと見ていろかと思えば、俺の服のシミに気がついたようだった。

「あんた血が……」

弟は頭から血が下がり、話ができるようになった。

「則斗さんは、最近おかしな行動はしていないか？」

むすつとした様子だが、弟は少し考えてから話す。

「……一緒に姉貴探してくれたりしてくれたけど、それ以外は家に部屋にこもりつきりだよ」

「部屋に簾穂寺が監禁されているとこう可能性は？」

「まさか！ 僕はノリ兄の部屋にも行つたけど誰も……」

話の途中で何かに気づいたように言つてよどむ弟を問い合わせる。

「……ノリ兄の部屋には誰もいなかつたけど、地下なり……」

則斗さんの執着、ふりから考へて、遠くに監禁したりはしないはずだ。

「簾穂寺はさきつとやうこころ。早く助けに行くぞ！」

「お、おひー！」

弟と足を引きずつた俺は急いで簾穂寺の家へ向かった。

簾穂寺つ、無事でこうよー！

23話 後悔先にたたず？（前書き）

視点：主人公

## 23話 後悔先にたたず？

綾君、シスコンのくせに私がどこにいるかわからないなんてダメダメじゃない。電波並みに姉の居場所キヤツチしてよ……なんて我僕か。

お腹減った……綾君の手作り料理食べたい……綾君会いたい。

「お……きー……りょー。」

誰？ 私の安眠を邪魔するのは、もう少し寝かせなさいよ。

身体を揺り動かされ、寝てるわけにもいかず目を開けると、目の前には綾君……？

「ううううう。ううううー。（何だ。夢かー。）」

再び目を閉じて眠る体勢に入る。監禁中はすることもなく、刺激もないためすぐに眠くなつてくる。窓もなく光が入らない部屋で今が何日目かさえもわからない。

夢なら食事くらい持つて来なさいよね。本当に気がきかないんだから。

バリバリバリッ！

「つー 痛つー！」

勢いよく口にくついていたガムテープを剥がされ、あまりの痛さに悶絶する。

「おひつ！ 姉貴！ 大丈夫か！？」

「綾君！？ 本物……！」

綾君が身体を拘束していたロープをはずしてくれる。手が自由になつたと同時に綾君に抱きく。綾君はよろめきながらも抱きしめてくれる。

「'ひひひ、怖かつたよー。」

年甲斐もなく泣き続け、落ち着いたころに藤宮先生がいたことに気づく……恥ずかしいわ。

「簾穂寺……無事で良かった」

「先生！？ 生きてて良かつた。身体は大丈夫なんですか？」

「詳しい説明は後だ。とりあえず脱出するぞー。」

綾君に支えてもらいながら立ち上がる。久々に立ったので生まれたての小鹿のように足がブルブルする姿を、綾君と藤宮先生は心配そうに私を見ていたので、安心させるため微笑もうと前を向く。

「先生つ！ 後ろ！」

藤宮先生の背後にはノリトさんが手に持ったランプを振り上げている。先生が振り返ろうとした瞬間 ゴスッ！

鈍い音とともに先生の身体が吹っ飛ぶ。先生は壁に身体を打ちつけ苦悶の声を上げる。部屋を照らしていたランプはガシャンと床に落ち、火が木造の建物に燃え移る。

「藤宮先生！」

近衛わいつと足を動かすと、綾君が私の腕を掴んで行かせてくれない。綾君は顔を左右に降つて行くなと言つている。

「藤宮、また僕の邪魔をしに来たのですか」

ノリトさんの濁つた目には藤宮先生しか映つていない。

「つ！ 則斗さん……俺は！」

「本当にあなたは下等な虫のよつた生命力を持つていますね。呆れ果てます。また、百合を殺したよつこ、トワちゃんまで僕から奪つつもりでしよう…？」

「そんなことは考へていない。百合のこともあれば百合がー。」

「五月蠅い、いのちや、ウルさーつー。」

ノリトさんはもう一方の手に持つた物を目の前に出す。

「ふふふ、トワちゃんは近づかないで下さいね。怪我しますよ」

火が地下室全体に燃え移り、部屋が明るくなるとノリトさんの手に持つているものが日本刀だとわかる。鞘を床に投げ捨て、先生に

切つ先を向ける。

「もう絶対に渡さないー。」

「ノ、ノリトさん。やめてー。」

田を覚ましてと願いを込めながら、震える声でノリトさんの名を呼ぶ。ノリトさんは優しく笑いかけてくれる。

「藤宮を殺したら、すぐに一緒に逃げましよう。……綾くんも邪魔ですね。ここで殺してこきましよう。君を傷つけたりしませんから、ダイジヨウアップですよ」

「弟っ！ 今だ！！」

ノリトさんが私に気をとられている隙に、藤宮先生の合図で姿勢を低くした綾君が、ノリトさんのわき腹に肘鉄をいれる。衝撃で日本刀を落とし、カラリと金属が落ちた音が聞こえた。落ちた日本刀を藤宮先生が拾いノリトさんに突きつける。

「ぐううー！」

呻いたノリトさんは脇腹を押さえ、綾君ではなく藤宮先生を憎そうに、睨む。藤宮先生は、顔色も真つ青で体調が悪そうだったが、氣力で必死に向き合っていた。

「姉貴、早く。逃げるー。」

「でも藤宮先生がー。」

「わかつてゐから

それだけ言つと、綾君は藤宮先生に近づき日本刀を奪つ。

「弟、何をする!?」

「貸せつてーの怪我人は足手まといだ。姉貴、先公連れて上へ行け!  
ノリ兄……こいつは俺が見ておく」

藤宮先生は、驚いた顔をして弱く反抗したが、私の手も振り払え  
ないようで、すぐに諦めおとなしくなる。

「綾君も一緒に!—」

綾君よりノリトさんのはうが力が強い。刀が合つても、安心はで  
きない。

もし、綾君に何かあつたら……

「姉貴も先公も足手まといだ! 梯子が焼け落ちる前に早く行けつ  
て!」

綾君の言つことは正しい。何もできない私と、具合が悪そうな藤  
宮先生では分が悪い。残りたい気持ちをぐつと我慢して、藤宮先生  
の手を引く。

「藤宮先生行きましょう

「簾穂寺、しかしつ……」

泣る藤宮先生の手を引き、梯子を上る。

「綾君、絶対に戻ってきて、死ぬんじゃないわよ」

「つたりめーだ。馬鹿姉貴……」

先生に肩を貸し、無事外に脱出できた私と先生は燃える家を眺める。綾君が帰つてこないんじゃないかと不吉なことばかり考えてしまつ。

「綾君……」

「やつぱり俺が見てくる……」

「藤宮先生！ 血が！？」

さうといつ無理をしていたらしく、先生は立つこともできない。服は真つ赤に染まり出血の酷さが素人でもわかる。

「これくらいこびーってことねえ。お前は救急車と消防車を呼べ

藤宮先生に携帯を借り、救急と消防に電話をする。数分もしないうちに救急車と消防車が来て鎮火と先生の手当てをしてくれる。消防隊員の人達が綾君を担いで出てくる。

「綾君！ 綾君！」

綾君はぐつたりしていたが、意識はしつかりとあった。

「…………あね……わ」

「綾君、良かつた！ 生きてたつ」

「……勝手に死んだことにあるなよ……」

いつもの綾君に安心して、身体から力が抜ける。

「ノリトさんは？」

「……わかんねえ」

「そり」

その後、救急車に運ばれ病院に来た。綾君は全身の火傷は軽度だったが、念のため数日入院することになった。私は付き添いで一緒に病室に泊まっている。

家で燃えたのはノリトさんの部屋と地下室だけでほとんど無事だった。ノリトさんの遺体も見つからず。まるで、ノリトさんはどこにもいなかつたんじゃないと思えるほど、ノリトさんにに関するものが消えてしまった。

今後はどうなるんだろう。不安を抱えながらも病室にお見舞いで貰った花を生けていると綾君が真剣な表情で考え込んでいる。

「どうしたの？ 綾君？」

「俺さ、死にそうになつて考えたんだ……」

「何を？」

「俺、姉貴が……トワが好きだ」

驚いて一瞬思考が止まってしまった。……でも、よく考えたら兄弟としてだよね。

「もひ、綾君がお姉ちゃん（わたし）のこと好きなのは昔からでしょ？ 知ってるわよ」

「違う！ そんなんじゃなくて俺は」

「失礼します。」

綾君の言葉を遮って病室に入ってきたのは可憐ちゃんだった。

「あの……お邪魔でしたか？」

首を傾げて戸惑った表情で聞いてくる可憐ちゃんに、できるだけ動搖がつたわらなように話す。

「大丈夫よ。可憐ちゃんはビリしてこない？」

「あのトワさんの弟さんが入院したって聞いて、お見舞いに……余計なお世話ですよね。すみません」

「そんなことないわ。ありがと、ここにいるのが弟の綾よ」

「…………せひも」

綾君は、機嫌が悪く。返事もつけない。今度は、彩君に可憐ちゃんを紹介する。

「はじめまして、災難でしたね。お家が火事なんて……あの私、お見舞いを持つてきましたんです。よかつたら」

可憐ちゃんが差し出したのは、女の子らしい可愛こわいピーナツ。

「バナナを練りこんだ、マフィンなんです。お口に合ひついこんですけど」

綾君がなかなかマフィンを食べないので、可憐ちゃんが悲しそうな表情をする。

「可憐ちゃんが可哀想じやない！ 私が食べちやえ！」

マフィンを口に入れる、バナナの風味と甘じよこ甘。

「美味しい！」

もつ一口食べようと、動かした手は私の意思に反して斜め後ろにいく。顔だけ後ろを振り向くと藤宮先生が、私の腕を引つ張つて食べかけマフィンにかじりつくる。

「つまいま」

「先生ー？ デリヘルー？」

「隣の病室にいるのに、お前がお見舞いに来ないから迎えにきた」

「ああ？ 頭でも打ったんですか？」

「お前、病人に冷たいな」

「先生、知つてます？病人は病室から抜け出してふらふら歩かないんですよ」

いつもとかわらない先生にほつとする。視線を感じて目を向けると、綾君と可憐ちゃんがじつと私と先生を見ていた。

「トワさんは……と仲がいいんですね……」

「え？」

可憐ちゃんがぼそつと話した言葉は、私の耳には届くことはなった。

先生は病室に帰り、彩君と一人になるのは気まずくて可憐ちゃんを送りうと廊下に出る。

「トワさん、私病院の屋上に行つてみたいんですけど……」

帰り際だった可憐ちゃんのお願いを快諾し、夜の病院屋上に行く。時間も時間だけに、少し肌寒く誰も人がいなかつた。空を見上げれば優しく光る満月に小さく息をはく。

ドンッ 後ろからぶつかられた衝撃を感じ、振り返る。

可憐ちゃんが転んだのかと思い、振り返る。可憐ちゃんは、なぜかにつこり天使のような微笑でいる。手には血で濡れた包丁を持っている。

可憐ちやんの笑顔誰かに似てる?……どこつか血? 誰の!?

背中に手を這わせると生暖かいねつとした液体で濡れている。

「私の血……」

出血に気づくと腹の辺りが痛いことより、じわじわと熱くなる。

「ねえ、貴女はあの人近く過ぎたの。関らなければ、こんなことしなかつたのに」

「あの人?」

言われて浮かんでくるのは、綾君の姿しかない。

「そろそろ、いいでしょ? 私に……返して、トコさん

本物の主人公!?<sup>プロトタイプ</sup> 確かめよつと口を開くが意識が朦朧として喋れない。自分の血だまりにしゃがみ込む。

私、死んじゃうのかな?

頭に浮かんでくるのは、綾君の怒った顔、笑った顔、困った顔様々な記憶にある表情が浮かぶ。そこでやつと気づいた。

私、綾君が好きだったんだ…離れたくなかった、死にたくない

もうどうでもできないと心の中の冷めた部分が告げてくる。もう

一度、目を開こうと身体に力をいれるがわずかにも動かない。

綾君に私も好きって言えば良かつたな……

耳を澄ますとわずかに音が聞こえる音。小さな音だつたがだんだん大きくなり耳が痛くなるほど聞こえる。

明確に聞こえる音は、誰かの声ではなく、機械的な警報音だつた。不安を煽る無機質な警報音は鳴り止むことはない。

戸惑つて いる私に追い討ちを掛けるように一面真っ白だつた視界に真っ赤な文字が浮かび上がる。

“error”

“error”

“error”

何、これ？ 嫌つ！ 綾君助けて！

何も理解できないまま目の前の文字が霞み始め、意識を失う直前にかすかに人の声が聞こえた気がしたが、混乱する頭には何を言っているのかはわからなかつた。

「

」

## 24話 弟視点・姉貴！？

視点・弟・綾

姉貴が刺されたって聞いたときには、寝呆けたこと言つてんなつて感じで信じられなかつた。緊急手術後、病室に行つてベッドに横たわる青白い顔をした少女を見たら、もう頭が真つ白になつて息ができなくなつた。間違いなく、俺の一番大切な姉貴。

出血は多かつたが、命に別状はないと医者が言つていた。もう麻酔も切れて目を覚ましてもいいのに、姉貴の瞼は貝のように閉じたままである。

「早く田え開けろよ……」

勝手にくたばんな告白したばっかだろ、返事聞かせりよ。

綺麗な顔で姉貴がベッドの横たわっている姿は、眠り姫。眠り姫なら王子のキスで目覚める。

「そんな簡単なことで田がさめるわけないか……俺を一人にすんなよ、トツ……」

姉貴のベッドの横に立ちつくす。

なんで姉貴が刺されたんだ……刺したのは誰？ ノリトさんか？ どっちにしても姉貴をこんなめに呑わせた奴を同じ……それ以上に怖い目を見せなきゃ気がすまねえ！

暗い思考に気をとられていた時、病室の外から物音がして、我に

帰る。閉じられた病室の扉を睨む。

姉貴を刺した奴でも来たのか？

ドカッと大きな音をさせて入ってきたのは……「綾！」「アヤ！」

「親父！？ お袋！？」

「ふふ、やだ〜パパ、ママでしょ〜？」綾つたら

「！」と笑顔で息子の頬を抓るな！ お袋！

「アヤ！ ホームがカジってマジなの？ トヲはやられたつテ？」

親父日本語変すぎるから……

大きな旅行鞄を両手に親父とお袋のお喋りがとまらない。聞いてるかはわからないが、一応姉貴が意識不明なことを伝える。

「トヲちゃんが意識不明？！ なんてことなのマイク！」

マイク？……ああ、親父の名前か。聞きなれないから、ここで歌いだすのかと思った。ちなみにお袋の名前は明美あけみ。

「OK！」

親父が返事をして、姉貴に何をしだすかって、えええええキス！？

「親父！？ 何してんだよ！」

「パパのキスだ！」

「あよとんとして何か悪い」としたかつて顔すんな！

「トワちゃんは昔からパパと結婚するって言つて離れなかつたものね！」

「パパはトワの『テスティーパリス』！」

「マイク！！ 私とのことは遊びだつたのね！」

「NO！ アケニさんは僕のヴィーナス！ クイーン・ジャステイス  
！！ ジャパニーズおふざくちテス！」

親父やつぱり日本語つていうか、知識そのものが変だろー？

「そんなんで姉貴の目が覚めるわけないだろー？」

「もつ綾つたら、嫉妬？ 綾もしたかったの？」

「つ……はあー？ そ、そんなわけないだろー！ だ、だれが（  
姉貴と）キキキキキ、キスなんて……」

「アヤはトレやネー ん～～まつ！」

親父の顔が急接近してきまつじゅまづまほあまづまほー！？

「ひゃせや—————？」

お、親父にキスされた……最悪……

とつてに親父を殴った。親父は〇エーといこながらわざとひっくり倒れる。

「うたなんで姉貴の目が覚めるわけなあ、ああ！？」

姉貴は皿を開けてじっと見ている。

「姉貴ー、良かった……っ、心配かけさせんじゃねーよ」

駆け寄つておぼこよると、ヒヒヒヒ笑って答えてくれる。

「綾、心配かけた」めんなさいね

「あねえっ。」

「…………どうしたんですか？ そんなに驚いた顔して、ふふふ」

声を低くして聞く。

なんで姉貴が敬語？ 僕の利き間違いか？

「お姉ちゃんですよ」

「わつよ綾、何言つているの？ お姉ちゃんの顔を忘れたの？」

「ソウだよー、トコトコんだー。」

親父とお袋は姉貴だといつても信じられない。親父、お袋と楽し

そう云ふ話してこる口調も雰囲気も違つ。違つ。違つ。

田の前にいる異物、姉貴の皮を被つた何だ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6072q/>

---

Dear 狂愛

2011年12月31日17時46分発行